

富山市埋蔵文化財調査報告42

富山市

ひゃくつかすみよし

百塚住吉D遺跡

発掘調査報告書

— 基幹農道（呉羽和合4期地区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

2011

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告42

富山市

ひゃくづかすみよし

百塚住吉D遺跡

発掘調査報告書

— 基幹農道（呉羽和合4期地区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

2011

富山市教育委員会

例 言

1. 本書は、富山市ハヶ山、寺島地内に所在する百塚住吉D遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、富山県（農林水産部農村環境課）が事業主体となる県営基幹農道（呉羽和合4期地区）整備事業に伴うものである。富山県富山農林振興センター農村整備課の依頼を受けて富山市教育委員会の監理のもとに、株式会社イビソクに委託して実施した。
3. 発掘調査の期間、発掘面積、調査担当者等は次の通りである。
発掘調査 平成22年11月8日～平成23年2月4日 発掘面積900㎡
出土品整理 平成22年12月20日～平成23年2月28日
担当 株式会社イビソク 日聖祐輔、兼康保明
（監理 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター 鹿島昌也）
4. 本書の執筆は第I章第1節を鹿島、第III章第2節、第IV章第2節を阿部弥生（㈱イビソク）、その他を日聖が担当した。編集は日聖が行った。
5. 理科学的分析については㈱パレオ・ラボに委託し、その成果を第V章に掲載した。
6. 本調査の図面・写真・出土品等の資料は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

1. 遺構略号は、HS-Dである。
2. 検出遺構は次の略号で表した。ピット (SP) 土坑 (SK) 溝 (SD)
3. 本文中ならびに挿図中における標高は、東京湾平均海面 (T.P) である。また、遺跡全体図は、公共座標（世界測地第VII系）に基づき設定したものである。したがって、個別遺構図に記した標高・方位はすべてこの座標系と一致している。
4. 実測図は基本的に次の縮尺とし、スケールを図中に示した。
遺構実測図 1/40 遺物実測図 1/3
5. 遺構覆土等の土色観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 新版「標準土色帖」1996年度版を使用した。
6. 文中における杯に付すA・Bについて、Aは無台、Bは有台を表すものとする。

目 次

第I章 経過	
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業の経過	2
第3節 整理作業の経過	2
第4節 調査の方法	2
第II章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第III章 1区の調査	
第1節 遺構	7
第2節 遺物	11
第IV章 2区の調査	
第1節 遺構	13
第2節 遺物	21
第V章 理化学的分析	
第1節 放射性炭素年代測定	35
第2節 出土木材の樹種同定	37
第3節 出土動物遺体の同定	38
第VI章 総括	
第1節 縄文土器	39
第2節 1区	39
第3節 2区	39
<遺構写真図版>	
<遺物写真図版>	
<報告書抄録>	

挿 図 目 次

第1図 奥羽和合第4期地区計画一般平面図 (1/25,000)	第12図 2区遺構図 (2) (1/6, 1/60, 1/40)
第2図 作業状況	第13図 2区遺構図 (3) (1/160, 1/40)
第3図 調査区位置図 (1/5,000)	第14図 2区遺構図 (4) (1/40)
第4図 グリッド配置図 (1/2,000)	第15図 2区遺構図 (5) (1/4, 1/8, 1/40)
第5図 調査区周辺主要遺跡 (1/25,000)	第16図 2区遺構出土遺物 (1) (1/3)
第6図 調査区全体図 (1/400)	第17図 2区遺構出土遺物 (2) (1/3)
第7図 1区遺構配置図 (1/200)	第18図 2区遺構・表土・攪乱出土遺物 (3) (1/3, 1/4)
第8図 1区遺構図 (1) (1/20, 1/40)	第19図 暦年校正結果
第9図 1区遺構図 (2) (1/120, 1/60)	第20図 出土木材の光学顕微鏡写真
第10図 1区遺構・表土・攪乱出土遺物 (1/3)	第21図 出土動物遺体
第11図 2区遺構図 (1) (1/160, 1/40)	第22図 遺跡周辺の古地理復元概念図

表 目 次

第1表 1区出土遺物観察表

第2表 2区出土遺物観察表

第3表 測定試料及び処理

第4表 放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果

写真図版目次

- | | | |
|--------|----------------------------|-----------------------------|
| 写真図版1 | 1. 調査区遺景 (南から) | 7. SD65セクションAA' (南から) |
| | 2. 調査区全景 (上が北) | 8. SD65セクションBB' (南から) |
| 写真図版2 | 1. 1区調査前状況 (東から) | 写真図版11 |
| | 2. 1区遺構検出状況 (西から) | 1. SD65完掘状況 (南から) |
| 写真図版3 | 1. SK38セクション (西から) | 2. SD66セクションAA' (南から) |
| | 2. SK38完掘状況 (西から) | 3. SD66セクションBB' (南から) |
| | 3. SK41遺物出土状況 (北から) | 4. SD66骨出土状況 (南から) |
| | 4. SK41完掘状況 (南から) | 5. SD66完掘状況 (南から) |
| | 5. SK42セクション (南西から) | 6. SD70-69-68セクションAA' (南から) |
| | 6. SK42完掘状況 (西から) | 7. SD70-69-68セクションBB' (南から) |
| | 7. SK59セクション (西から) | 8. SD70-69-68セクションCC' (南から) |
| | 8. SK59完掘状況 (西から) | 写真図版12 |
| 写真図版4 | 1. SK60セクション (西から) | 1. SD70-69-68遺物出土状況 (南から) |
| | 2. SK60完掘状況 (西から) | 2. SD70-69-68完掘状況 (南から) |
| | 3. SK61セクション (南から) | 3. SD73セクションAA' (南から) |
| | 4. SK61完掘状況 (南から) | 4. SD73セクションBB' (南から) |
| | 5. SD16セクションAA' (東から) | 5. SD73完掘状況 (南から) |
| | 6. SD16セクションBB' (東から) | 6. SD74セクションAA' (南から) |
| | 7. SD16セクションCC' (東から) | 7. SD74セクションBB' (南から) |
| | 8. SD16完掘状況 (東から) | 8. SD74完掘状況 (南から) |
| 写真図版5 | 1. SK54-53-50検出状況 (南から) | 写真図版13 |
| | 2. SK54-53-50セクション (南から) | 1. SD76セクションCC' (北から) |
| 写真図版6 | 1. SK54-53-50遺物出土状況 (南東から) | 2. SD76完掘状況 (南から) |
| | 2. SK54-53-50完掘状況 (南から) | 写真図版14 |
| 写真図版7 | 1. 2区調査前状況 (西から) | 1. SD76遺物出土状況 (東から) |
| | 2. 2区遺構検出状況 (上が北) | 2. SD76遺物出土状況 (東から) |
| 写真図版8 | 1. SK67セクション (北から) | 3. SD78セクション (南西から) |
| | 2. SK67完掘状況 (北から) | 4. SD78完掘状況 (南から) |
| | 3. SK72セクション (南から) | 5. SE56セクション (南から) |
| | 4. SK72完掘状況 (南から) | 6. SE56遺物出土状況 (南から) |
| | 5. SK80セクション (北から) | 7. SE56完掘状況 (南から) |
| | 6. SK80遺物出土状況 (北から) | 8. 作業状況 |
| | 7. SD55セクション (南から) | 写真図版15 |
| | 8. SD55遺物出土状況 (南から) | 1. 1区遺構出土遺物 |
| 写真図版9 | 1. SD55完掘状況 (南から) | 2. 1区表上・攪乱出土遺物 |
| | 2. SD57セクションCC' (南から) | 写真図版16 |
| | 3. SD57セクションDD' (南から) | 1. 1・2区出土遺物 |
| | 4. SD57セクションEE' (南から) | 写真図版17 |
| | 5. SD57完掘状況 (南から) | 1. 2区遺構出土遺物 (1) |
| 写真図版10 | 1. SD58セクションCC' (南から) | 2. 2区遺構出土遺物 (2) |
| | 2. SD58セクションDD' (南から) | 写真図版18 |
| | 3. SD58完掘状況 (南から) | 1. 2区遺構出土遺物 (3) |
| | 4. SD64セクションEE' (南から) | 2. 2区遺構出土遺物 (4) |
| | 5. SD64セクションFF' (南から) | 写真図版19 |
| | 6. SD64完掘状況 (南から) | 1. 2区SD76出土遺物 (1) |
| | | 2. 2区SD76出土遺物 (2) |
| | | 写真図版20 |
| | | 1. 2区表上・攪乱出土遺物 (1) |
| | | 2. 2区表土・攪乱出土遺物 (2) |
| | | 写真図版21 |
| | | 1. 石製品 |
| | | 2. SD66出土磁片 |
| | | 写真図版22 |
| | | 1. SD76出土陶磁器 |
| | | 2. 2区攪乱出土陶磁器 |
| | | 3. SE56出土遺物 |

第1章 経過

第1節 調査の経過

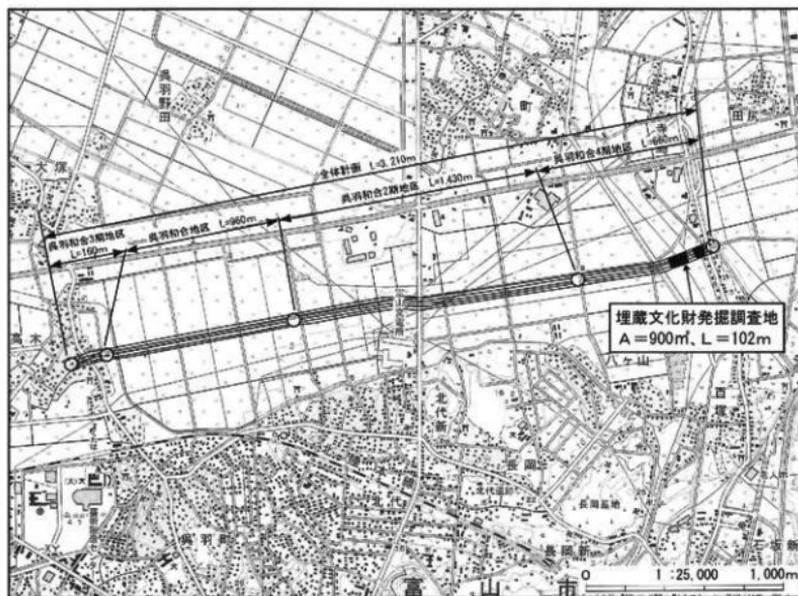
富山市呉羽和合地区（高木～寺島地内）で農免農道（平成21年度から基幹農道）を整備する計画が、富山県農林水産部農村環境課より平成8年に立案され、平成12年に実施採択された。流通機構の合理化並びに農村環境の改善を図ることを目的とする。国道8号線の南側約500mに位置し、東西方向に並走する農道である。西は県道中沖・呉羽線、東は主要地方道富山八尾線と交差し、総延長は3,210mである。計画線上に八町Ⅱ遺跡や八ヶ山A遺跡、百塚住吉D遺跡が所在する。

平成13～19年度にかけて、呉羽和合2期地区（延長1,430m）の区間で、八町Ⅱ遺跡にかかる試掘調査及び発掘調査（285㎡）、出土品整理・報告書作成を実施した（2008 富山市教育委員会）。

平成19年～20年度にかけては、同地区（延長95.9m）の区間で、八ヶ山A遺跡にかかる試掘調査及び発掘調査（285㎡）、出土品整理・報告書作成を実施した（2010 富山市教育委員会）。

平成20年11月4日～5日にかけて、呉羽和合4期地区（延長650m）の区間のうち、百塚住吉D遺跡の埋蔵文化財包蔵地にかかる試掘調査を2,015㎡を対象に実施した。その結果、900㎡に遺跡の所在を確認した。本路線は、水田の中に道路を新設する区間にあたり、遺跡の所在を確認した900㎡の範囲について発掘調査による保護措置を講ずることとなった。

用地買収を経て、平成22年度に発掘調査に着手することとなった。発掘調査は富山県富山農林振興センター農村整備課から依頼を受け、富山市教育委員会が監理を行いながら、民間発掘調査機関に調査及び出土品整理作業を委託して実施し、平成23年3月に報告書を刊行した。（鹿島）



第1図 呉羽和合第4期地区計画一般平面図（国土地理院 1:25,000富山の一部を使用）

第2節 発掘作業の経過

現地発掘調査中はおおむね2週間に一度、監理担当者・調査担当者による定例工程会議を開催し、進捗状況や問題点を把握した。また、調査の各工程終了時には段階確認検査を実施し、適正な業務実施に努めた。

平成22年10月15日に、富山市教育委員会埋蔵文化財センターと㈱イソソクが現地安全管理上の重要事項を確認した。10月30日に㈱イソソクが提出した発掘調査計画書に基づく協議を行い、11月8日から現地調査に着手した。

平成23年2月4日に調査を終え、すべての現地発掘調査業務を終了した。2月7日付けで工事主体者である富山県富山農林振興センターへ現地を引渡した。

第3節 整理作業の経過

現地発掘調査中から、出土品の水洗い・注記・接合などの基礎的な整理作業を併行して実施した。出土遺物は、細片が多かったため実測可能なものはできるだけ図化するよう努めた。こうした作業と併行して、遺跡の年代・性格を明らかにするための理化学的分析を実施した。整理作業中は、工程会議を実施し、進捗状況や問題点を把握した。平成23年3月17日に報告書発送・成果品納入を行い、すべての業務を完了した。

第4節 調査の方法

今回の調査区は2カ所に分かれているため、東側調査区を1区(200m)、西側調査区を2区(700m)として調査を開始した。

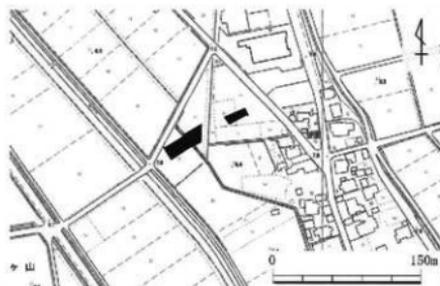
発掘調査は11月8日から開始した。まず、バックホウを使用して表土掘削を行い、11月13日に終了した。

11月12日から人力による壁面清掃、開渠掘削作業を開始した。11月16日から遺構検出作業を開始し、土坑や溝を中心とする遺構を検出した。遺構検出作業終了後、調査区内の清掃作業を行い、11月25日にラジコンヘリを使用して、遺構検出状況の航空撮影を行った。

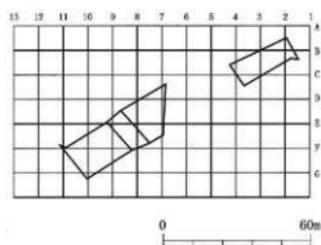
11月29日から遺構掘削作業を開始した。調査の工程、天候の状況等を考慮し、土坑など、小規模遺構を中心に検出している1区を優先して掘り下げることにした。1区の調査が終了に近づいた12月3日から、2区の掘削作業を開始した。平成23年1月25日に掘削作業を終了し、航空撮影に向け、調査区内の清掃を開始した。途中、降雪等にみまわれたが、2月3日には、ラジコンヘリを使用して遺構完掘状況の航空図化撮影を行った。撮影終了後、補足の記録作業を行い、2月4日で本遺跡の調査を完了した。



第2図 作業状況



第3図 調査区位置図 (1/5,000)



第4図 グリッド配置図 (1/2,000)

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

百塚住吉D遺跡は、富山市街から北西約4.5kmの富山市八ヶ山および寺島地内に所在する。約1.8km東には神通川が流れ、南西には富山平野を呉西・呉東に二分する呉羽丘陵が南北に延びている。神通川は、江戸時代の度重なる洪水によってその流れが大きく変わっており、本遺跡は旧流路の河岸段丘上、標高7～8mに位置する。また、周辺には、縄文海進を起因とする低湿地帯が広がっている。これは縄文海進の際、古放生津潟ができ、そこへの流入河川によって形成された砂州が発達したものである。

周辺は呉羽丘陵を中心に、旧石器時代から近世までの遺跡が確認されており、県内でも遺跡密集地の一つとして数えられる。また、近年の発掘調査では、八ヶ山A遺跡、八町II遺跡など中・近世の集落遺跡が検出されている。

第2節 歴史的環境

旧石器時代 呉羽丘陵上や北代遺跡で石器が確認されている。しかし、いずれも単独出土、もしくは数点程度で出土している状況である。

縄文時代 前期では小竹貝塚、蛭ヶ森貝塚がある。いずれも丘陵下の平野部に位置し、縄文海進によって形成された潟湖が、丘陵周辺まで広がっていたことを示すものである。特に小竹貝塚の貝層は、鳥浜貝塚と並んで日本海側最大級の規模をもつ。近年の調査では、住居や、多数の埋葬人骨が確認されている。

中期では北代遺跡、北代加茂下III遺跡がある。北代遺跡は、70棟以上を数える住居や掘立柱建物が確認されており、北陸でも同時期を代表する集落遺跡である。昭和59年に史跡に指定され、平成11年からは富山市北代縄文広場として活用されている。

後期から晩期では、長岡八町遺跡がある。掘立柱建物や大型柱穴が確認されているほか、土間や石棒などの祭祀遺物がまとめて出土しており、祭祀を行う拠点集落としての性格が考えられている。

弥生～古墳時代 中期以前の様相は判然としなが、江代割遺跡や四方荒屋遺跡で、弥生中期から古墳前期の集落が確認されている。古墳時代前期から中期には、八町II遺跡があり、畿内系や山陰系の土器が出土しているほか、玉作り遺跡の性格もうかがえる遺跡である。墳墓は、百塚遺跡、百塚住吉遺跡で、弥生時代後期から古墳時代初頭の方形周溝墓や前方後方墳などがみられるほか、北陸最古級とされる前方後円墳も確認されている。また、呉羽丘陵上でも、杉谷古墳などの初期古墳をはじめ、中期の古沢塚山古墳、後期から終末期にかけての番神山横穴墓、金屋陣の穴横穴墓群がみられる。

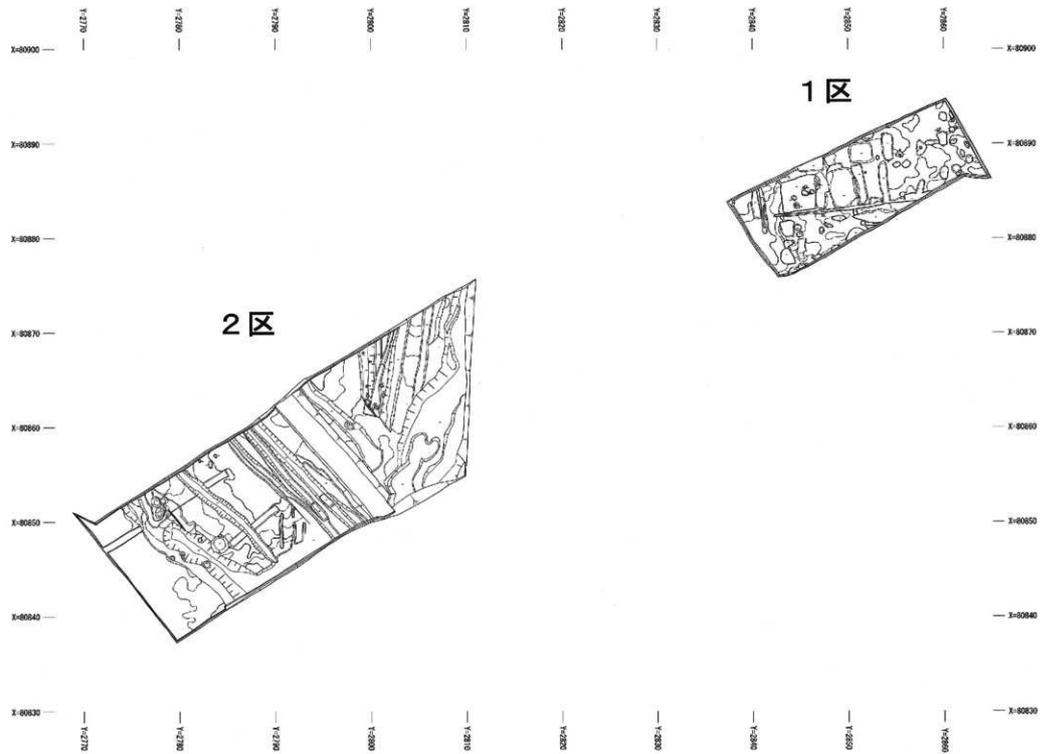
古代 北代遺跡、長岡杉林遺跡、百塚住吉D遺跡など、射水平野の開発を背景に、集落遺跡が急激に増加する。北代遺跡では竪穴住居や掘立柱建物のほか、鍛冶炉が検出されており、生産活動と関連した集落とみられている。また、長岡杉林遺跡では、瓦塔や緑釉陶器などの仏教遺物も出土しており、祠堂といった村落内寺院をもつ集落とみられる。その他、四方荒屋遺跡、四方西野割遺跡、四方北窪遺跡でも掘立柱建物が検出され、打出遺跡では平安時代の道路跡が確認されている。

中世 海岸部近くでは四方北窪遺跡、四方荒屋遺跡、打出遺跡がある。四方北窪遺跡では掘立柱建物や畑、道路などの遺構が検出され、三津七濤の一つ、中世岩瀬に関連する集落とみられている。また、四方荒屋、打出遺跡では屋敷跡が検出されている。近年では八町II遺跡で鎌倉～室町時代の集落遺跡が確認された。多数の井戸のほか、千鳥紋を施した漆器も出土しており、中心的集落としての性格が考えられている。

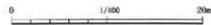


1. 百塚住吉D遺跡
2. 百塚住吉遺跡
3. 百塚住吉B遺跡
4. 百塚遺跡
5. 今市遺跡
6. 八町II遺跡
7. 八ヶ山A遺跡
8. 宮尾遺跡
9. 八ヶ山C遺跡
10. 八ヶ山B遺跡
11. 百塚住吉C遺跡
12. 長岡八町遺跡
13. 北代加茂神社遺跡
14. 長岡小学校西遺跡
15. 北代加茂下III遺跡
16. 八町D遺跡
17. 八町A遺跡
18. 八町C遺跡
19. 八町B遺跡
20. 百塚住吉E遺跡
21. 百塚B遺跡
22. 百塚鍵割遺跡
23. 八ヶ山遺跡
24. 北代遺跡
25. 北代東遺跡
26. 長岡杉林遺跡
27. 四方北塚遺跡
28. 江代割遺跡
29. 四方荒屋遺跡
30. 打出遺跡
31. 蛭ヶ森貝塚
32. 杉坂古墳群

第5図 調査区周辺主要遺跡 (1/25,000)



第6图 调查区全体图 (1/400)



第三章 1区の調査

第1節 遺構

本調査区は、標高7.0m前後に位置し、周辺道路との比高差は約1.0mを測る。平均厚35cmの表土を掘り下げたところで、遺構面である黄褐色土の地山面を検出した。地山面は、東から西へ向かって下る緩斜面状を呈するが、これは後世の削平によるものである。

今回検出した遺構は、土坑11基、溝1条である。いずれも調査区中央部から西寄りに位置している。これらの他にも多数のプランを検出したが、掘削を行った結果、壁の立ち上がりが不明瞭なものや、底部の形状、覆土の堆積状況などから、遺構と確定できるものはみられなかった。

土坑

SK38 (第8図、写真図版3)

B3グリッドで検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し、長軸長1.30m、短軸長0.70m、深さ0.30mを測る。底面は南端へ向かって緩やかに落ち込み、壁は内湾しながら立ち上がる。覆土は黄灰色土の単層で、律令期の遺物を含む。

SK41 (第8図、写真図版3)

B3グリッドで検出した土坑である。平面形は不整形を呈し、長軸長1.67m、短軸長0.65m、深さ0.17mを測る。底面には凹凸がみられ、壁は急斜状に立ち上がる。覆土は黄灰色土の単層で、律令期の遺物を含む。

SK42 (第8図、写真図版3)

B3グリッドで検出した土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、長軸長4.00m、短軸長3.64m、深さ0.05～0.16mを測る。底面には凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は多量の地山ブロックを含む黄灰色土の単層で、律令期の遺物を含む。また、SK59・60・61と重複関係をもち、いずれよりも古い遺構である。住居地の可能性も考えられたが、貼床などの痕跡は確認できなかった。

SK50 (第9図、写真図版5・6)

B2グリッドで検出した土坑である。平面形はL字形を呈し、長軸長4.50m、短軸長2.10m、深さ0.04～0.15mを測る。底面には凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は地山ブロックが混じる黄灰色土の単層で、律令期の遺物を含む。また、SD16と重複関係をもち、それよりも古い遺構である。

SK53 (第9図、写真図版5・6)

B2グリッドで検出した土坑である。平面形は不整形を呈し、長軸長4.25m、短軸長1.06m、深さ0.18mを測る。底面には凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は黄灰色土の単層で、律令期の遺物を含む。また、SD16・SK54と重複関係をもち、いずれよりも古い遺構である。

SK54 (第9図、写真図版5・6)

B2・B3グリッドで検出した土坑である。平面形は不整形を呈し、長軸長4.97m、短軸長2.80m、深さ0.25mを測る。底面には凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は黄灰色土の単層で、律令期の遺物を含む。その他、底面からは近世以降とみられる硝子が出上しているが、部分的な攪乱による混入と思われる。また、SD16・SK53と重複関係をもち、SD16より古く、SK53より新しい遺構である。

SK59 (第8図、写真図版3)

B3グリッドで検出した土坑である。平面形は不整形を呈し、長軸長0.72m、短軸長5.93m、深さ0.40mを測る。底面にはやや凹凸がみられ、壁は急斜状に立ち上がる。覆土は地山ブロックを含む黄灰色土を基本に5層に分かれる。1・5層中からは、律令期の遺物が出土している。

SK60 (第8図、写真図版4)

B3グリッドで検出した土坑である。平面形は不整形円形を呈し、長軸長0.55m、短軸長0.52m、深さ0.52mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は直斜状に立ち上がる。覆土は黄灰色土を基本に、3層に分かれる。遺物は出土していない。また、SK42と重複関係をもち、それよりも新しい遺構である。

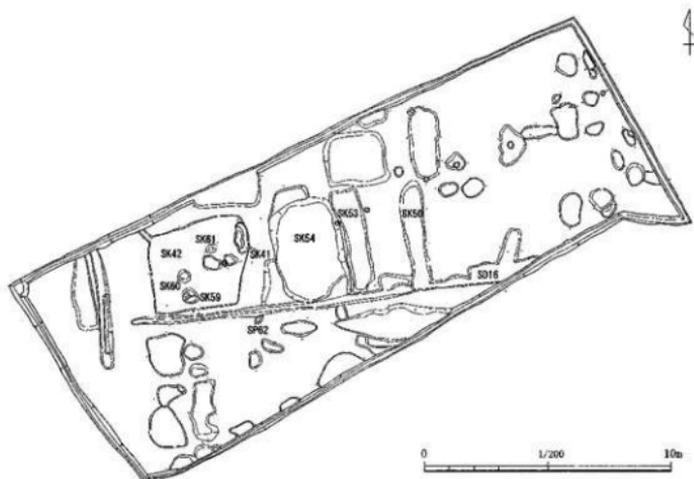
SK61 (第8図、写真図版4)

B3グリッドで検出した土坑である。平面形は不整形円形を呈し、長軸長0.47m、短軸長0.36m、深さ0.18mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は直斜状に立ち上がる。覆土は黄灰色土を基本に2層に分かれ、1層中から律令期の遺物が出土している。

溝

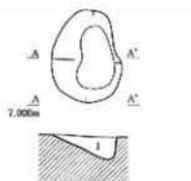
SD16 (第9図、写真図版4)

B2・B3グリッドで検出した溝である。幅0.24～0.40m、長さ15.75m、深さ0.09～0.18mを測り、東西方向に走る。溝の東端は調査区外へ延び、西端は後世の削平によって失われている。底面は平坦で、壁は急斜状に立ち上がる。覆土は黄灰色土を基本に2～4層に分かれ、1・3層中から律令期の遺物が出土している。また、SK50・SK53・SK54と重複関係をもち、いずれよりも新しい遺構である。



第7図 1区遺構配置図

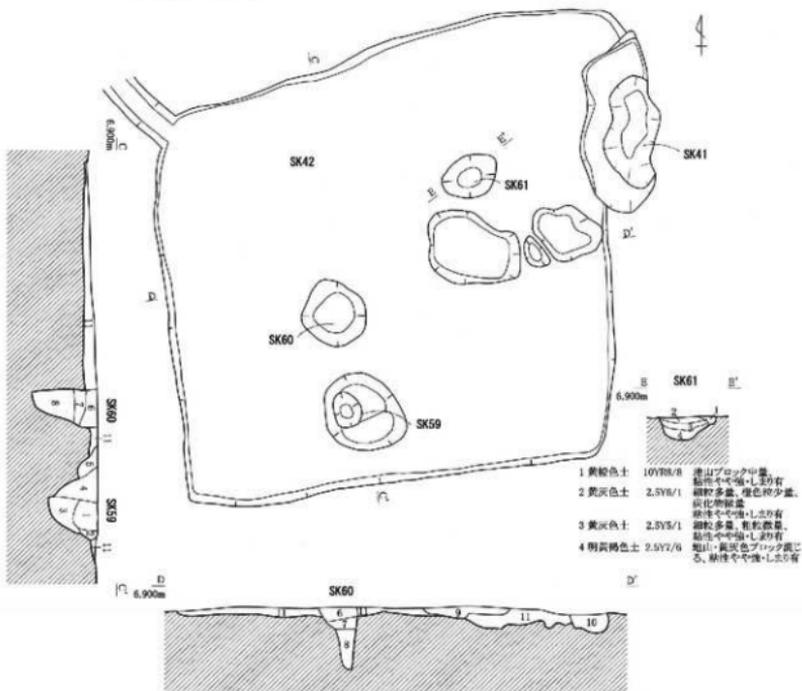
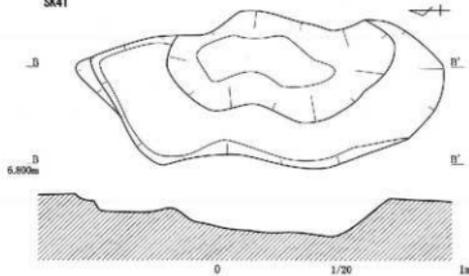
SK38



1 黄灰色土 2.5V/1 雑粒多量、褐色粒散在、
地山ブロック散在、柱状・しまり有

0 1/60 1m

SK41

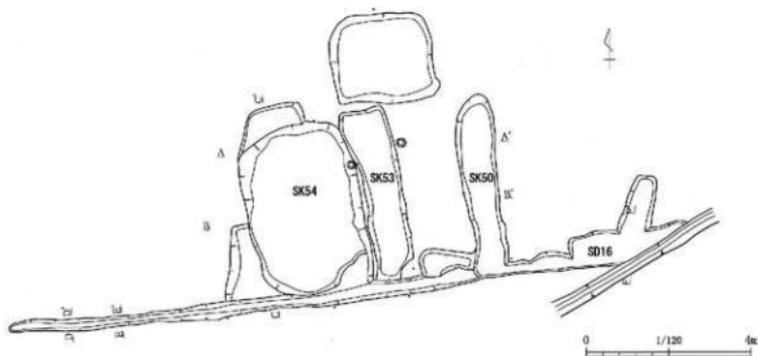


- 1 黄緑色土 10YR5/8 地山ブロック中量、
粘りややれ・しまり有、
雑粒多量、褐色粒少量、
灰白ブロック少量
2 黄灰色土 2.5V/6 粘りややれ・しまり有、
雑粒多量、褐色粒少量、
灰白ブロック少量、
粘りややれ・しまり有
3 黄灰色土 2.5V/5 雑粒多量、褐色粒散在、
粘りややれ・しまり有
4 明黄褐色土 2.5Y/6 地山・黄灰色ブロック散在、
粘りややれ・しまり有

- 1 黄灰色土 2.5V/1 細粒多量、褐色粒散在、地山ブロック散在、灰化体散在、粘りややれ・しまり有
2 黄灰色土 2.5V/1 地山ブロック中量、粘りややれ・しまり有、粘りややれ・しまり有
3 黄灰色土 2.5V/1 細粒多量、褐色粒散在、地山ブロック少量、灰白ブロック少量、粘りややれ・しまり有
4 黄灰色土 2.5V/1 細粒多量、褐色粒散在、地山ブロック少量、灰白ブロック少量、粘りややれ・しまり有
5 黄灰色土 2.5V/1 1部-4部よりやや明るい、雑粒多量、褐色粒散在、地山ブロック多量、灰白ブロック少量
粘りややれ・しまり有
6 黄灰色土 2.5V/1 細粒多量、褐色粒少量、地山ブロック少量、灰白ブロック多量、粘りややれ・しまり有
7 灰白色土 2.5V/2 地山ブロック少量(黄灰色土)、粘りややれ・しまり有
8 黄灰色土 2.5V/1 細粒多量、褐色粒散在、褐色粒散在、地山ブロック多量、粘りややれ・しまり有
9 灰白色土 2.5V/1 細粒多量、小石少量、粘りややれ・しまり有
10 黄灰色土 2.5V/1 細粒多量、地山ブロック中量、粘りややれ・しまり有
11 黄灰色土 2.5V/3 細り・粘り多量、灰白色ブロック・黄褐色ブロック少量、粘りややれ・しまり有

0 1/40 2m

第8図 1区遺構図(1)



7.000m A SK54 SK53 A'



- | | | |
|--------|---------|-------------------------------------|
| 1 黄灰色土 | 2.5Y4/1 | 細粒多量、粗粒少量、地山ブロック少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや弱 |
| 2 黄灰色土 | 2.5Y5/1 | 細粒多量、粗粒少量、地山ブロック少量、炭化物微量、粘性・しまりやや弱 |
| 3 黄灰色土 | 2.5Y5/1 | 細粒多量、地山ブロック多量、粘性・しまり有 |

7.000m B SK54 SK53 SK50 B'



- | | | |
|--------|---------|-------------------------------------|
| 1 黄灰色土 | 2.5Y4/1 | 細粒多量、粗粒少量、地山ブロック少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや弱 |
| 2 黄灰色土 | 2.5Y5/1 | 細粒多量、粗粒少量、地山ブロック少量、炭化物微量、粘性・しまりやや弱 |
| 3 黄灰色土 | 2.5Y7/4 | 細粒多量、粗粒中量、地山ブロック多量、粘性・しまりやや弱 |
| 4 黄灰色土 | 2.5Y5/1 | 細粒多量、粗粒少量、炭化物微量、粘性・しまりやや弱 |
| 5 黄灰色土 | 2.5Y6/1 | 細粒多量、粗粒少量、地山ブロック少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや弱 |

SD16・SK54
7.000m C SD16 SK54 C'



- | | | |
|----------|---------|----------------------------|
| 1 SD16壁上 | | |
| 2 黄灰色土 | 2.5Y5/1 | 細粒多量、粗粒少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや弱 |

SD16
7.000m B B'



- | | | |
|--------|---------|-------------------------------------|
| 1 黄灰色土 | 2.5Y6/1 | 細粒多量、粗粒少量、地山ブロック中量、炭化物微量、粘性やや強・しまり有 |
| 2 黄灰色土 | 2.5Y6/1 | 細粒多量、粘性やや強・しまり有 |
| 3 黄灰色土 | 2.5Y6/1 | 細粒多量、粗粒少量、地山ブロック微量、粘性・しまり弱 |

7.000m D SD16 SK42 D'



- | | | |
|--------|---------|-------------------------------------|
| 1 黄灰色土 | 2.5Y6/1 | 細粒多量、粗粒少量、地山ブロック中量、炭化物微量、粘性やや強・しまり有 |
| 2 黄灰色土 | 2.5Y5/1 | 細粒多量、粗粒少量、粘性やや強・しまり有 |
| 3 黄灰色土 | 2.5Y6/1 | 細粒多量、粗粒少量、地山ブロック中量、粘性・しまりやや弱 |
| 4 黄灰色土 | 2.5Y6/1 | 細粒多量、粗粒少量、地山ブロック多量、粘性やや強・しまり有 |

7.200m F SD16 SD17
排水溝



- | | | |
|--------|---------|--------------------------------|
| 1 黄灰色土 | 2.5Y5/1 | 細粒多量、地山ブロック中量、粘性・しまりやや弱 |
| 2 黄灰色土 | 2.5Y4/1 | 細粒多量、炭化物微量、地山ブロック微量、粘性やや強・しまり有 |
| 3 黄灰色土 | 2.5Y5/1 | 細粒多量、粗粒少量、地山ブロック中量、粘性やや強・しまり有 |

0 1/90 2m

第9図 1区遺構図(2)

第2節 遺物

本調査区から出土した遺物は、コンテナ2箱分であった。出土した遺物は、奈良・平安時代の須恵器、土師器を中心に、縄文土器、弥生土器、中・近世の遺物も少量ながらみられる。表土のほか、遺構認定できなかった穴からも出土している。全体的に細片が多く、実測可能なものは少なかった。

1. 遺構出土遺物

SK42 (第10図、写真図版15)

1は土師器の甕である。口縁部のみ残存する。外側に開き、肥厚気味の端部を丸くおさめる。

SK50 (第10図、写真図版15)

2は須恵器の蓋である。天井部の器壁は厚い。体部の稜は弱く、天井部からなだらかに端部へ下る。天井部に回転ヘラケズリを施す。

3は杯Aである。底部外面は回転ヘラ切後未調整である。残存している体部の状況から、立ち上がりは直斜状になるとみられる。

SK53 (第10図、写真図版15)

4は須恵器の杯Aである。体部は丸みをおびながら外方へ開く。底部の器壁は厚く、外面は回転ヘラ切後未調整である。

SK54 (第10図、写真図版15)

5～9は須恵器である。5は蓋である。天井部の器壁は厚く、扁平な宝珠形つまみをもつ。体部の稜は弱く、天井部からなだらかに端部へ下る。口縁端部は下方へ短く屈曲させ、断面は三角形を呈する。

6は杯の口縁部である。端部は丸くおさめる。小片のため、全体の形状等は不明である。

7・8は杯Aである。7の底部は回転ヘラ切後未調整である。8は体部が丸みをおびながら外側へ開き、口縁端部を丸くおさめる。

9は瓶である。外面には回転ヘラケズリが施される。内面には強い回転ナデの痕跡が明瞭に残る。

10は八尾焼、甕の頸部である。外面に焼き膨れがみられ、内外面に降灰がみられる。

11はガラスである。緑がかった透明色で、気泡を含む。近世以降の遺物で、部分的な攪乱による混入とみられる。

SD16 (第10図、写真図版15)

12・13は須恵器である。12は蓋の口縁部である。端部は下方へ短く屈曲させる。

13は杯である。口縁部のみ残存し、端部は丸くおさめる。小片のため、全体の形状等は不明である。

2. 表土・攪乱出土遺物 (第10図、写真図版15・16・21)

14～26は須恵器である。14・15は蓋である。14は器壁がやや厚く、天井部からなだらかに端部へ下る。口縁端部は下方へ短く屈曲させる。15は肩の稜が弱く、天井部から端部へなだらかに下る。口縁端部は下方へ短く屈曲させる。

16～18は杯である。16・17は、いずれも体部が外反気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。小片のため、全体の形状等は不明である。18は器壁がやや厚く、体部はやや内湾気味に、大きく外側へ開く。

19は皿である。底部のみ残存し、器壁はやや厚めである。底部は回転ヘラ切後未調整である。

20～21は杯Aである。20は底部のみ残存し、器壁はやや厚めである。焼成が悪く、調整が不明瞭である。21の体部は外反気味に、大きく外側へ開きながら立ち上がる。9世紀前半頃のものである。

22は杯Bである。底部のみ残存する。内外面に回転ナデが施され、底部外面には外側に張り出す、低

い高台をもつ。小片のため、全体の形状等は不明である。

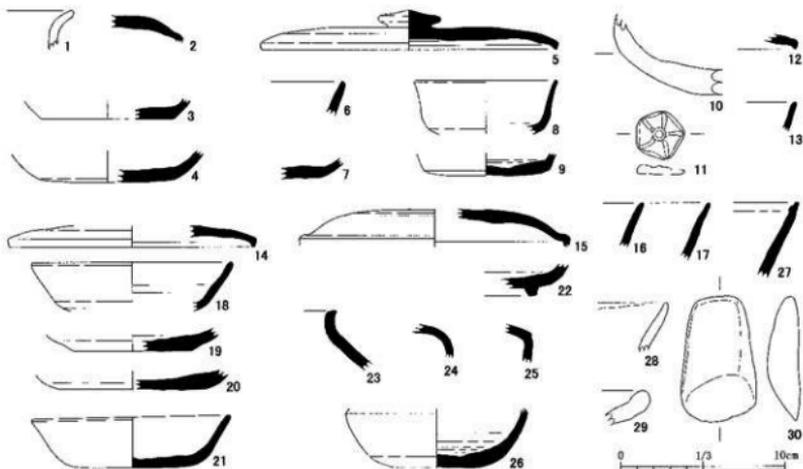
23は短頸壺である。口縁端部は強い回転ナデが施され、外側へ斜位に立ち上がっている。内外面は回転ナデを施し、外面には降灰がみられる。

24～26は瓶である。24・25はいずれも肩の一部のみ残存する。25は肩部外面に沈線がみられる。26は器壁がやや厚く、内面には強い回転ナデが施される。底部外面は回転ヘラケズリを施し、平坦な面を形成している。外面は降灰のため、調整が不明瞭である。全体の形状と調整方法から瓶と判断した。

27は鉢である。内面には輪積痕と、強い回転ナデの痕跡がみられる。また、口縁端部は外側へ斜位に立ち上がる。

28・29は上師器の甕である。いずれも口縁部のみ残存し、器表面は磨滅している。28の外面にかろうじてハケメの痕跡がうかがえる。

30は磨製石斧である。長軸長7.7cm、短軸長4.5cmを測る小型のものである。上面には縦横に走る擦痕がみられる。下面にも部分的に摩擦痕が確認できる。



第10図 1区遺構・表土・攪乱出土遺物

第IV章 2区の調査

第1節 遺構

本調査区では、中央部に南北方向の用水路が設けられていた。地山検出時、この用水路を境に東西の地山面比高差は0.30m前後であった。圃場整備の際、特に用水路から東側が大きく削平を受けたためである。また、遺構検出面でも、その際に受けたとみられる攪乱の痕跡を多数確認した。

基本層序は、表土直下で遺構面となる地山面を検出した。表土は、平均厚35cmで堆積し、近・現代遺物のほか、律令期の遺物を一定量含んでいた。検出した遺構は、ピット8基、土坑8基、溝13条、井戸2基である。

1. 土坑

SK67 (第11図、写真図版8)

D8グリッド、SD58の底面で検出した土坑である。平面形は不整形を呈し、長軸長1.05m、短軸長0.69m、深さ0.40mを測る。底面はやや門凸がみられ、壁は直斜状に立ち上がる。覆土は黒褐色土を基本に3層に分かれ、底面から磨石が出土している。SD58と重複関係をもち、それより古い遺構である。SK72 (第12図、写真図版8)

F9グリッド、SD55内で検出した土坑である。平面形は不整形を呈し、直径1.77m、深さ0.46mを測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は、黒褐色土を基本に大きく3層に分かれ、1層から律令期の土師器片が出土している。SD55と重複関係をもち、それよりも古い遺構である。

SK80 (第11図、写真図版8)

F9グリッド、SD55内で検出した土坑である。平面形は円形を呈し、直径0.70m、深さ0.46mを測る。底面はやや凹凸がみられ、壁は垂直に立ち上がる。覆土は、黄灰色土を基本に大きく4層に分かれる。いずれの層も律令期の須恵器・土師器片を含むが、遺構底部からは、完形に近い9世紀前半の須恵器・杯Bが出土している。また、SD55と重複関係をもち、それよりも新しい遺構とみられる。

2. 溝

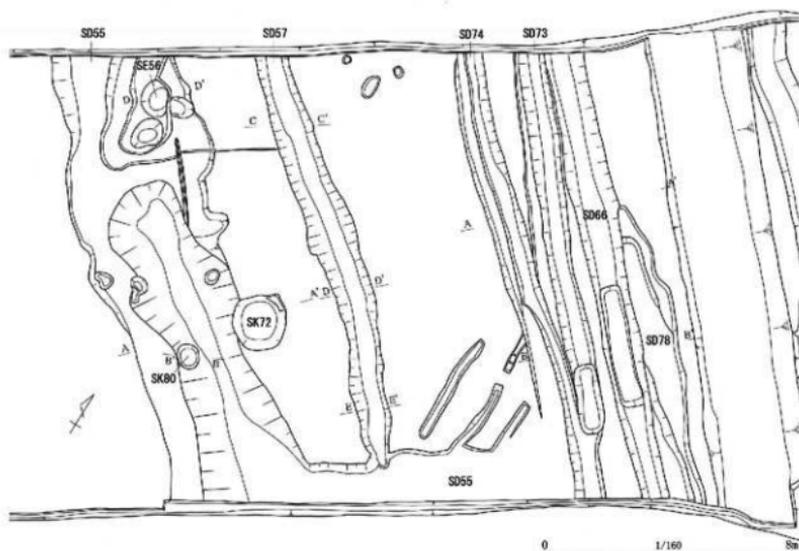
SD55 (第12図、写真図版8・9)

E10・F9・10グリッドで検出した溝である。幅3.32～4.48m、長さ26.0m、深さ0.43mを測る。北西・南東方向に走り、調査区南端際で北東方向へ流れを変えている。全体的に後世の攪乱を受けており、特に溝の肩は不明瞭である。底面にはやや凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色土を基本に大きく3層に分かれ、いずれの層にも遺物を含む。出土遺物は8世紀後半～9世紀前半の須恵器・土師器を中心に、少量ながら縄文・弥生土器がみられる。

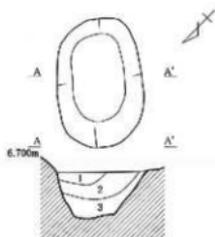
本遺構はSE56・SK72・SK80・SK81と重複関係をもち、SK72より新しく、SE56・SK80・SK81より古い遺構である。

SD57 (第11図、写真図版9)

E9・F9グリッドで検出した溝である。幅1.04～1.34m、長さ13.9m、深さ0.16～0.26mを測り、北西・南東方向に走る。溝北端は調査区外へ延びるが、南端は後世の攪乱を受けているため、調査区内で途切れている。底面はほぼ平坦で、壁は急斜状に立ち上がる。覆土は暗灰色土を基本に大きく2層に分かれる。1層中から8世紀後半頃の須恵器・蓋と、律令期の土師器片が出土している。

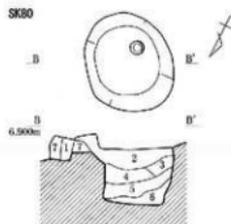


SK67



- | | | |
|-----------|---------|--------------------------------|
| 1 黒褐色土 | 2.5V3/1 | 細粒多量、粘付・しよりややぬ |
| 2 黒褐色土 | 2.5V3/1 | 細粒多量、地山ブロック散在
粘性・しより強 |
| 3 オリーブ黒色土 | 5V3/1 | 細粒多量、地山ブロック散在
赤土石や骨、粘付・しより強 |

SK80



- | | | |
|--------|---------|------------------------------------|
| 1 (暗渠) | 2.5V3/1 | 細粒多量、砂粒散在、地山ブロック少量、粘性有・しよりややぬ |
| 2 黒褐色土 | 2.5V4/1 | 細粒多量、褐色粘質土、砂粒少量、粘性有・しよりややぬ弱 |
| 3 黒褐色土 | 2.5V4/1 | 2層よりやや粗い、細粒多量、褐色粘質土、粘性有・しよりややぬ弱 |
| 4 黒褐色土 | 2.5V4/1 | 細粒多量、地山ブロック少量、粘性有・しよりややぬ |
| 5 黒褐色土 | 2.5V3/1 | 細粒多量、粘性やや強・しよりややぬ |
| 6 黒褐色土 | 2.5V3/1 | 細粒多量、粘性やや強・しよりややぬ |
| 7 灰色土 | N7/0 | 細粒多量、粗粒散在、砂粒少量、粘付やや強・しより弱 (SD55埋土) |

SD57

7.200m



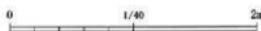
- | | | |
|--------|---------|------------------------------------|
| 1 黒灰色土 | 2.5V6/1 | 細粒多量、褐色粘質土、地山ブロック散在、粘性有・しよりややぬ (弱) |
| 2 黒灰色土 | 2.5V6/1 | 細粒多量、褐色粘質土、地山ブロック散在、粘付・しよりややぬ |
| 3 灰白色土 | 2.5V7/1 | 細粒多量、地山ブロック多量、灰黒ブロック少量、粘性有・しよりややぬ |
| 4 黒灰色土 | N3/0 | 細粒多量、粗粒少量、地山ブロック散在、粘性有・しよりややぬ |
| 5 灰白色土 | 2.5V7/1 | 細粒多量、砂粒少量、地山ブロック散在、粘性有・しよりややぬ |

- | | | |
|--------|---------|--|
| 1 暗灰色土 | N3/0 | 細粒多量、地山ブロック多量、
灰色ブロック中量、粘性有・しより強 (掘丸) |
| 2 灰白色土 | 2.5V7/1 | 細粒多量、粗粒少量、粘付有・しよりややぬ |

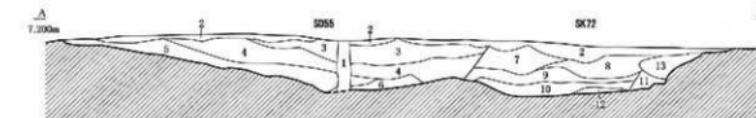
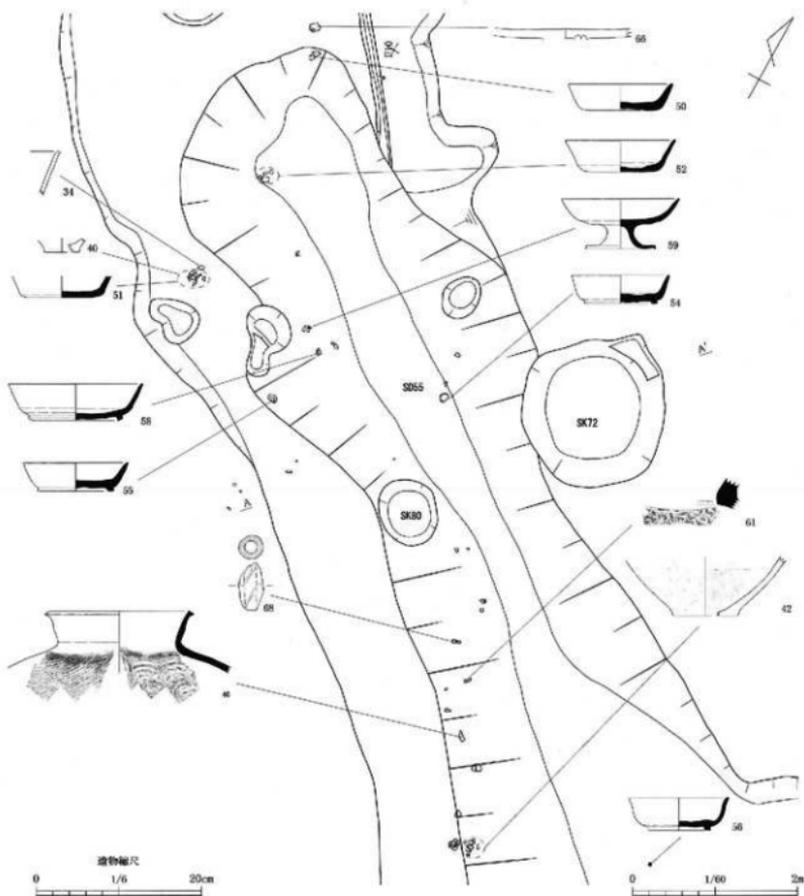
7.200m



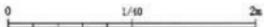
- | | | |
|--------|---------|--------------------------------------|
| 1 灰白色土 | N7/0 | 細粒多量、粘土層、粘付・しよりややぬ (掘丸) |
| 2 暗灰色土 | N3/0 | 細粒多量、地山ブロック多量、灰色ブロック中量
粘性有・しよりややぬ |
| 3 灰白色土 | 2.5V7/1 | 細粒多量、粗粒少量、粘付有・しよりややぬ |



第11図 2区遺構図(1)



- 1 (特選) 2.5V6/2 細砂多量、赤鉄燧土、緑砂多量、3層の黒色土少量混じる、粘性・しまりやや割（覆瓦）
 2 黄灰色土 10Y7.2/1 細砂多量、粘中強・しまりやや割
 3 黒色土 10Y7.4/1 細砂多量、粘中強土、粘性強・しまりや
 4 黒色土 2.5V2/1 細砂多量、粘性やや強・しまりやや割
 5 黒褐色土 2.5V3/1 細砂多量、粘中強土、赤山ブロック燧土、粘性やや強・しまりやや割
 6 黒褐色土 10Y8.1/1 細砂多量、粘中・しまりやや強
 7 灰黄褐色土 10Y8.4/2 細砂多量、粘中強土、粘性やや強・しまりやや割
 8 黄灰色土 2.5V4/1 細砂多量、粘中強土、粘性やや強・しまりやや割
 9 黄灰色土 2.5V4/1 細砂多量、粘中強土、粘中強土、赤山ブロック燧土、粘性強・しまりやや割
 10 黄灰色土 2.5V5/1 細砂多量、粘中強土、粘中強土、赤山ブロック燧土、粘性有・しまりやや割
 11 黄灰色土 2.5V5/1 細砂多量、粘中強土、粘中強土、赤山ブロック燧土、粘性有・しまりやや割
 12 黄灰色土 2.5V4/1 細砂多量、粘中強土、粘中強土、赤山ブロック燧土、粘性有・しまりやや割
 13 黄灰色土 2.5V5/1 細砂多量、粘中強土、粘中強土、赤山ブロック燧土、粘性有・しまりやや割



第12図 2区遺構図(2)

SD58 (第13図、写真図版10)

D8・E8グリッドで検出した溝である。幅1.38～1.73m、長さ10.8m、深さ0.30mを測り、北西-南東方向に走る。溝北端は調査区外へ延び、南端は後世の攪乱を受け、調査区内で途切れている。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土はにぶい赤褐色土を基本に2層に分かれる。1層からは8世紀後半頃とみられる須恵器・蓋(つまみ)や、少量の土師器片が出土している。また、溝中央部の底面でSK67を検出し、断面観察から、本遺構より古い遺構とみられる。

SD64 (第13図、写真図版10)

C7・D7グリッドで検出した溝である。幅1.16～1.41m、長さ11.01m、深さ0.18～0.24mを測り、南北方向に走る。溝北端は調査区外へ延びるが、南端は後世の攪乱を受け、調査区内で途切れている。底面はやや凹凸がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は、黄灰色土を基本に2層に分かれ、1層から律令期の須恵器・土師器片が出土している。

SD65 (第13・15図、写真図版10・11)

C7・D7グリッドで検出した溝である。幅0.90m、長さ9.25m、深さ0.15～0.24mを測り、南北方向に走る。溝北端は調査区外へ延びるが、南端は後世の攪乱を受け、調査区内で途切れている。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は、黄灰色土を基本に2層に分かれ、いずれの層からも律令期の土師器片が出土している。また、SD76と重複関係をもつが、攪乱を受けているため、前後関係は不明である

SD66 (第11・14図、写真図版11)

E8・E9グリッドで検出した溝である。幅1.20m、長さ15.12m、深さ0.90～1.00mを測る。北西-南東方向に走り、溝の両端は調査区外へ延びている。底面は平坦で、壁は急斜状に立ち上がる。覆土は大きく、黄灰色土、褐灰色土、青灰色土の3層に分かれる。遺物は、8世紀後半とみられる須恵器が出土しているが、珠洲や越中瀬戸など、中・近世遺物も混じるため、上半部は攪乱を受けている。また下層からは獣骨が出土しており、分析を行った結果、比較的大型の陸生哺乳類であった。

本遺構はSD73・SD76・SD78と重複関係をもち、いずれよりも新しい遺構である。

SD68 (第13図、写真図版11・12)

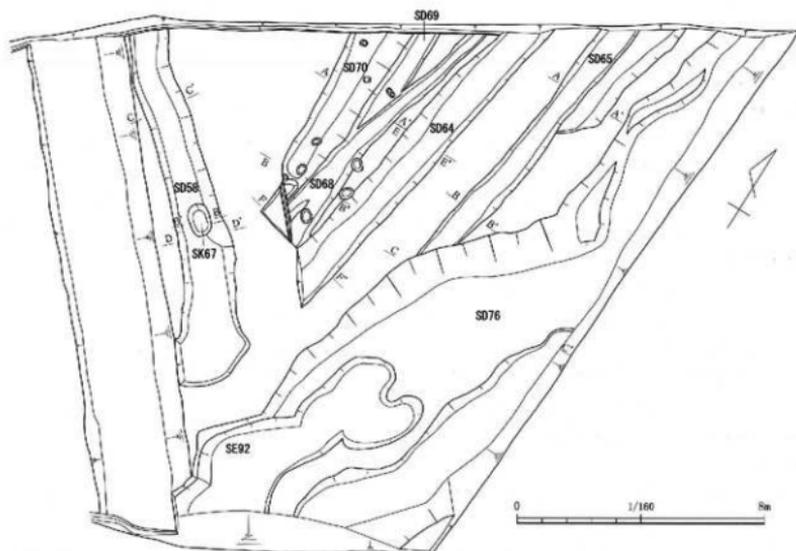
D7グリッドで検出した溝である。幅0.42m、長さ9.12m、深さ0.18～0.30mを測り、南北方向に走る。溝北端は調査区外へ延びるが、南端は後世の攪乱を受け、調査区内で途切れている。底面は凹凸が激しく、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は、黄灰色土を基本に2層に分かれ、いずれの層からも律令期の須恵器・土師器片が出土しているほか、砥石や敲石などの石器もみられる。SD69・SD70と重複関係をもち、いずれよりも新しい遺構である。

SD69 (第13図、写真図版11・12)

D7グリッドで検出した溝である。幅0.77m、長さ8.07m、深さ0.16～0.20mを測り、南北方向に走る。溝北端は調査区外へ延びるが、南端は後世の攪乱を受け、調査区内で途切れている。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は、黄灰色土を基本に3層に分かれ、1層から8世紀後半の須恵器・杯と甕が出土している。SD68・SD70と重複関係をもち、SD68よりも古い、SD70との前後関係は不明である。

SD70 (第13図、写真図版11・12)

D7グリッドで検出した溝である。幅1.56～1.72m、長さ7.26m、深さ0.18mを測り、南北方向に走る。溝北端は調査区外へ延びるが、南端は後世の攪乱を受け、調査区内で途切れている。また、溝の西側も攪乱を受けており、不明瞭である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は、黄灰色土を基本



SD70-69-68



- | | | |
|--------|---------|------------------------------|
| 1 灰黄色土 | 2.5V7/2 | 細粒多量、褐色粒少量、砂粒散在、粘性・しまり中等（埋土） |
| 2 黄灰色土 | 2.5V6/1 | 細粒多量、砂粒散在、粘性・しまり中強（埋土） |
| 3 黄灰色土 | 2.5V6/1 | 細粒多量、褐色粒散在、粘性・しまり中等 |
| 4 黄灰色土 | 2.5V4/1 | 細粒多量、褐色粒散在、粘性・しまり中等 |
| 5 黄灰色土 | 2.5V6/1 | 細粒多量、砂粒散在、灰色ブロック散在、粘性・しまり有 |
| 6 黄灰色土 | 2.5V4/1 | 細粒多量、褐色粒散在、粘性・しまり有 |
| 7 黄灰色土 | 2.5V3/1 | 細粒多量、褐色粒散在、灰色ブロック少量 |
| 8 黄灰色土 | 2.5V5/1 | 細粒多量、灰色ブロック散在、粘性有・しまり中等強 |

SD70-69-68



- | | | |
|---------|---------|------------------------------------|
| 1 灰黄色土 | 2.5V7/2 | 細粒多量、砂粒散在、灰色ブロック少量、粘性有・しまり中等強（埋土） |
| 2 灰白色土 | 2.5V7/1 | 細粒多量、砂粒散在、灰色ブロック散在、粘性・しまり中等強（埋土） |
| 3 黄灰色土 | 2.5V4/1 | 細粒多量、粘性有・しまり中等弱 |
| 4 黄灰色土 | 2.5V4/1 | 細粒多量、褐色ブロック少量、粘性・しまり中等強 |
| 5 黄灰色土 | 2.5V4/1 | 細粒多量、褐色粒散在、粘性・しまり中等強 |
| 6 黄灰色土 | 2.5V5/1 | 細粒多量、褐色粒散在、灰色ブロック少量、粘性有・しまり中等強 |
| 7 黄灰色土 | 2.5V5/1 | 細粒多量、褐色粒少量、砂粒散在、 |
| 8 黄灰色土 | 2.5V5/1 | 細粒多量、灰色ブロック少量、粘性有・しまり中等 |
| 9 灰白色土 | 2.5V7/1 | 細粒多量、砂粒散在、砂粒散在、灰色ブロック少量、粘性有・しまり中等強 |
| 10 灰白色土 | 2.5V7/1 | 細粒多量、砂粒散在、灰色ブロック少量、粘性・しまり中等強 |



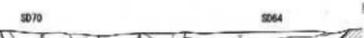
- | | | |
|-----------|---------|---------------------------------|
| 1 に近い赤褐色土 | 3.VR5/2 | 細粒多量、灰色ブロック多量、粘性有・しまり強 |
| 2 明黄褐色土 | 2.5V7/6 | 細粒多量、灰色ブロック少量、赤山ブロック少量、粘性有・しまり強 |
| 3 灰白色土 | 2.5V7/1 | 細粒多量、褐色粒散在、褐色ブロック少量、粘性有・しまり強 |



- | | | |
|-----------|---------|------------------------------|
| 1 に近い赤褐色土 | 3.VR5/2 | 細粒多量、灰色ブロック多量、粘性有・しまり強 |
| 2 黄褐色土 | 2.5V7/6 | 細粒多量、灰色ブロック少量、粘性有・しまり強 |
| 3 黄褐色土 | 2.5V7/1 | 細粒多量、褐色粒散在、褐色ブロック少量、粘性有・しまり強 |
| 4 黄褐色土 | 2.5V7/4 | 細粒多量、褐色粒散在、褐色ブロック少量、粘性有・しまり強 |
| 5 黄褐色土 | 2.5V7/6 | 褐色粒少量、褐色ブロック少量、粘性有・しまり中等強 |



- | | | |
|--------|---------|-----------------------------|
| 1 灰黄色土 | 2.5V6/2 | 細粒多量、褐色粒散在、褐色ブロック少量、粘性・しまり有 |
| 2 黄灰色土 | 2.5V6/1 | 細粒多量、褐色粒散在、粘性・しまり有 |
| 3 灰白色土 | 2.5V7/1 | 細粒多量、褐色粒散在、粘性・しまり有 |
| 4 黄灰色土 | 2.5V6/5 | 細粒多量、褐色粒少量、粘性・しまり有 |



- | | | |
|--------|---------|--------------------------------|
| 1 黄灰色土 | 2.5V6/1 | 細粒多量、褐色ブロック散在、粘性有・しまり中等強（埋土） |
| 2 黄灰色土 | 2.5V6/1 | 細粒多量、褐色粒散在、粘性・しまり中等強（埋土） |
| 3 灰白色土 | 2.5V7/9 | 細粒多量、褐色粒散在、粘性・しまり中等強（埋土） |
| 4 黄灰色土 | 2.5V5/1 | 細粒多量、砂粒散在、灰色ブロック散在、粘性・しまり有（埋土） |
| 5 黄灰色土 | 2.5V6/1 | 細粒多量、褐色粒散在、粘性有・しまり中等強（埋土） |
| 6 黄灰色土 | 2.5V6/1 | 細粒多量、褐色粒散在、粘性・しまり中等強 |
| 7 灰白色土 | 2.5V7/1 | 細粒多量、褐色粒散在、粘性・しまり中等強 |
| 8 黄灰色土 | 2.5V5/1 | 細粒多量、褐色粒散在、粘性・しまり有 |
| 9 黄褐色土 | 2.5V6/6 | 細粒多量、褐色粒散在、灰色ブロック少量、粘性・しまり中等強 |



第13図 2区遺構図(3)

に3層に分かれ、1・2層から9世紀前半の須恵器・杯が出土している。また、SD69と重複関係をもつが、前後関係は不明である。

SD73 (第11・14図、写真図版12)

E 8・9、F 8グリッドで検出した溝である。幅1.60m、長さ14.80m、深さ0.80mを測る。北西-南東方向に走り、溝両端は調査区外へ延びる。底面は平坦で、壁は急斜状に立ち上がる。覆土は大きく黄灰色、褐色、青灰色の3層に分かれ、2・3層中から律令期の須恵器が出土している。また、SD66・SD74と重複関係もち、SD66より古くSD74より新しい遺構である。

SD74 (第11・14図、写真図版12)

E 8・9、F 8グリッドで検出した溝である。幅1.06m、長さ15.05m、深さ0.53mを測る。北西-南東方向に走り、溝両端は調査区外へ延びる。底面は平坦で、壁は直斜状に立ち上がるが、西側面にはテラス状の平坦面がみられる。覆土は大きく黄灰色、褐色、青灰色の3層に分かれ、1・3層から律令期の須恵器・土師器片が出土している。本遺構は、SD66・SD74と重複関係もち、SD66より古くSD76より新しい遺構である。また、断面観察及び、遺構西側面に見られるテラスの状況から、3層は下層遺構の覆土である可能性が考えられる。

SD76 (第13・15図、写真図版13・14)

D 7・E 7グリッドで検出した溝である。幅6.20～7.80m、長さ23.37m、深さ0.90～1.10mを測る。南北方向に蛇行しながら走り、溝両端及び東層は調査区外へ延びる。底面には凹凸がみられ、壁は内湾気味に立ち上がる。覆土は大きく3層に分かれるが、1・2層は近世以降の攪乱をうけている。3層中からは8世紀後半～9世紀後半の須恵器が出土しているほか、縄文・弥生土器もみられる。また、溝南端部では、近世陶磁器や曲物などが集中して出土する箇所があり、近世以降の井戸 (SE92) が存在した可能性がある。

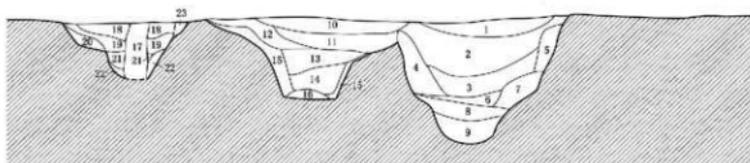
SD78 (第11・14図、写真図版14)

D 8・E 8グリッドで検出した溝である。残存幅0.80m、長さ9.24m、深さ0.48mを測る。北西-南東方向に走り、溝南端は調査区外へ延びる。溝西側はSD66に切られ、東側は用水路掘削時に攪乱を受けている。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは不明である。覆土は灰白色土、黄灰色土の2層に分かれ、2層中から律令期の須恵器・土師器片が出土している。また、溝南端部の底面では、北西方向へ落ちる掘り込みを検出した。SD66の西層でも同様の掘り込みを確認でき、2箇所的位置状況から、下層に別の溝が存在する可能性がある。

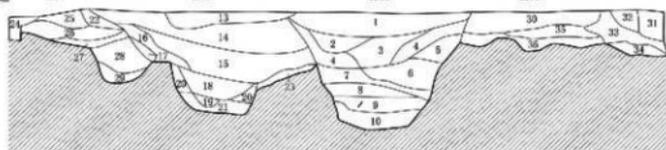
3. 井戸

SE56 (第15図、写真図版14)

E 10グリッドで検出した井戸である。平面形は不整形を呈し、長軸長1.20m、短軸長0.85m、深さ1.40mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は大きく褐色土、暗褐色土の2層に分かれるが、湧水で壁面が崩落したため、詳細は記録できなかった。遺物は筥が出土しているほか、遺構底部に埋め込まれた状態で、曲物が出土している。この曲物は、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行った結果、樹種はスギ材で、伐採年代は1032-1155AD (95.4%)の結果が得られた。このことから、本遺構は重複関係をもつSD55が埋没した後に掘削されたものである。



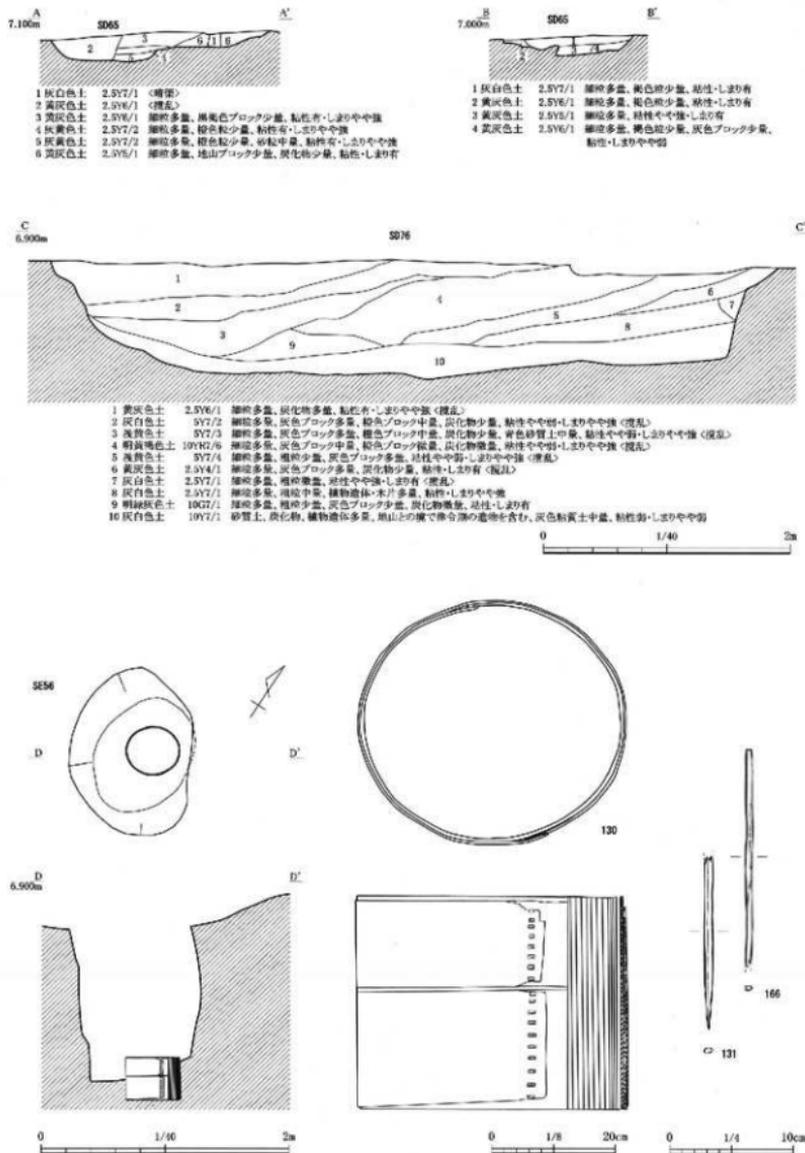
- | | | |
|----------|----------|---|
| 1 灰黄褐色土 | 10YR5/2 | 細砂多量、粘粒少量、褐色粘少量、地山ブロック少量、灰色ブロック中量、粘粒有・しまり強(覆瓦) |
| 2 粗灰赤土 | 10YR5/1 | 細砂多量、粘粒中量、褐色粘少量、地山ブロック中量、灰色ブロック少量、灰色砂粒ブロック少量、粘性有・しまり強 |
| 3 灰黄褐色土 | 10YR5/2 | 細砂多量、砂粒少量、地山ブロック少量、灰色ブロック少量、粘性有・しまり強 |
| 4 灰黄褐色土 | 10YR5/2 | 細砂多量、粘粒少量、地山ブロック少量、灰色ブロック少量、炭化物微量、粘性有・しまり強 |
| 5 灰白色土 | 10YR6/1 | 細砂多量、褐色粘中量、地山ブロック少量、灰色ブロック少量、粘粒有・しまりやや強 |
| 6 灰黄色土 | 2.5YR/1 | 細砂多量、粘粒中量、灰白色ブロック少量、シルト質、粘性強・しまりやや強 |
| 7 赤黄褐色土 | 10R5/7/1 | 細砂多量、粘粒中量、褐色粘少量、炭化物微量、シルト質、粘性やや強・しまり強 |
| 8 明黄褐色土 | 5BG/1 | 8層よりやや弱い、粘粒中量、褐色粘少量、炭化物少量、シルト質、粘粒・しまり強 |
| 9 粗灰赤土 | 10YR5/1 | 細砂多量、粘粒中量、褐色粘少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや強(覆瓦) |
| 10 粗灰赤土 | 10YR5/1 | 細砂多量、粘粒中量、褐色粘少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや強 |
| 11 粗灰赤土 | 10YR5/1 | 細砂多量、粘粒中量、褐色粘少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや強 |
| 12 粗灰赤土 | 10YR5/1 | 細砂多量、粘粒中量、褐色粘少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや強 |
| 13 粗灰赤土 | 10YR5/1 | 12層よりやや弱い、粘粒中量、褐色粘少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや強 |
| 14 粗灰赤土 | 10YR5/1 | 細砂多量、粘粒中量、褐色粘少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや強 |
| 15 灰白色土 | 10YR7/1 | 細砂多量、粘粒中量、褐色粘少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや強 |
| 16 灰白色土 | 10YR7/1 | 細砂多量、粘粒中量、褐色粘少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや強 |
| 17 (略) | | |
| 18 灰黄褐色土 | 10YR4/2 | 細砂多量、粘粒中量、粘粒有・しまりやや強 |
| 19 灰黄褐色土 | 10YR4/2 | 細砂多量、粘粒中量、粘粒有・しまりやや強 |
| 20 灰黄褐色土 | 10YR4/2 | 細砂多量、粘粒中量、粘粒有・しまりやや強 |
| 21 灰黄褐色土 | 10YR4/2 | 細砂多量、粘粒中量、粘粒有・しまりやや強 |
| 22 灰黄褐色土 | 10YR4/2 | 細砂多量、粘粒中量、粘粒有・しまりやや強 |
| 23 灰黄褐色土 | 10YR4/2 | 細砂多量、粘粒中量、粘粒有・しまりやや強 |



- | | | |
|----------|----------|--|
| 1 灰黄褐色土 | 10YR5/2 | 細砂多量、粘粒少量、褐色粘少量、地山ブロック少量、灰色ブロック中量、粘粒有・しまり強(覆瓦) |
| 2 粗灰赤土 | 10YR5/1 | 1層よりやや弱い、細砂多量、褐色粘少量、炭化物少量、粘性有・しまり強 |
| 3 灰白色土 | N7/0 | 細砂多量、地山ブロック少量、炭化物少量、粘性有・しまり強 |
| 4 灰白色土 | N7/0 | 細砂多量、地山ブロック少量、炭化物少量、粘性有・しまり強 |
| 5 灰黄褐色土 | 10YR5/2 | 地山ブロック少量、粘粒有・しまり強 |
| 6 灰白色土 | N7/0 | 細砂多量、地山ブロック少量、炭化物微量、粘性有・しまり強 |
| 7 粗灰赤土 | 2.5Y7/6 | 細砂多量、粘粒中量、褐色粘少量、炭化物微量、炭化物質微量、粘性有・しまりやや強 |
| 8 明黄褐色土 | 10R6/7/1 | 細砂多量、褐色粘少量、炭化物微量、シルト質、粘性有・しまりやや強 |
| 9 明黄褐色土 | 10R6/7/1 | 8層よりやや弱い、褐色粘少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや強 |
| 10 明黄褐色土 | 5BG/1 | 細砂多量、褐色粘少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや強 |
| 11 粗灰赤土 | 10YR5/1 | 細砂多量、粘粒中量、褐色粘少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや強 |
| 12 粗灰赤土 | 10YR5/1 | 細砂多量、粘粒中量、褐色粘少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや強 |
| 13 粗灰赤土 | 10YR5/1 | 15層よりやや弱い、細砂多量、褐色粘少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや強 |
| 14 粗灰赤土 | 2.5Y/1 | 細砂多量、褐色粘少量、粘粒有・しまりやや強 |
| 15 粗灰赤土 | 2.5Y/1 | 細砂多量、褐色粘少量、粘粒有・しまりやや強 |
| 16 粗灰赤土 | 2.5Y/1 | 細砂多量、褐色粘少量、粘粒有・しまりやや強 |
| 17 粗灰赤土 | 2.5Y/1 | 細砂多量、褐色粘少量、粘粒有・しまりやや強 |
| 18 粗灰赤土 | 2.5Y/1 | 細砂多量、褐色粘少量、粘粒有・しまりやや強 |
| 19 粗灰赤土 | 2.5Y/1 | 細砂多量、褐色粘少量、粘粒有・しまりやや強 |
| 20 粗灰赤土 | 2.5Y/1 | 細砂多量、褐色粘少量、粘粒有・しまりやや強 |
| 21 粗灰赤土 | 2.5Y/1 | 細砂多量、褐色粘少量、粘粒有・しまりやや強 |
| 22 粗灰赤土 | 2.5Y/1 | 細砂多量、褐色粘少量、粘粒有・しまりやや強 |
| 23 粗灰赤土 | 2.5Y/1 | 細砂多量、褐色粘少量、粘粒有・しまりやや強 |
| 24 (略) | | |
| 25 灰黄褐色土 | 10YR4/2 | 細砂多量、粘粒中量、粘粒有・しまりやや強 |
| 26 粗灰赤土 | 10YR5/1 | 細砂多量、粘粒中量、褐色粘少量、炭化物微量、粘性有・しまりやや強 |
| 27 灰黄褐色土 | 10YR6/2 | 細砂多量、地山ブロック中量、炭化物微量、粘性有・しまり強 |
| 28 灰黄褐色土 | 10YR6/2 | 細砂多量、地山ブロック中量、炭化物微量、粘性有・しまり強 |
| 29 灰黄褐色土 | 10YR6/2 | 細砂多量、地山ブロック中量、炭化物微量、粘性有・しまり強 |
| 30 灰白色土 | 2.5Y7/1 | 細砂多量、褐色粘少量、炭化物少量、粘性有・しまりやや強(覆瓦) |
| 31 灰白色土 | 2.5Y7/1 | 細砂多量、褐色粘少量、炭化物少量、粘性有・しまりやや強(覆瓦) |
| 32 灰白色土 | 2.5Y7/1 | 細砂多量、褐色粘少量、炭化物少量、粘性有・しまりやや強(覆瓦) |
| 33 灰白色土 | 2.5Y7/1 | 細砂多量、褐色粘少量、炭化物少量、粘性有・しまりやや強(覆瓦) |
| 34 粗灰赤土 | 2.5Y/1 | 細砂多量、褐色粘少量、粘粒有・しまりやや強 |
| 35 粗灰赤土 | 2.5Y/1 | 細砂多量、褐色粘少量、粘粒有・しまりやや強 |
| 36 粗灰赤土 | 2.5Y/1 | 細砂多量、褐色粘少量、粘粒有・しまりやや強 |

第14図 2区遺構図(4)

0 1/40 2m



第15図 2区遺構図(5)

第2節 遺物

本調査区から出土した遺物は、コンテナ8箱分であった。出土した遺物は、8世紀後半～9世紀前半の須恵器、土師器を中心に、縄文土器、弥生土器、中・近世の遺物も少量ながらみられる。

1. 遺構出土遺物

SK67 (第16図、写真図版21)

31は磨石である。上面中央部に緩やかな凹みが見られる。

SK80 (第16図、写真図版16・18)

32・33は須恵器である。32は蓋である。天井部は平坦で、口縁端部はやや肥厚気味におさめる。

33は杯Bである。体部は緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。高台はやや内側に付けられる。いずれも9世紀前半のものである。

SD55 (第16図、写真図版16・17)

34～41は縄文土器の鉢である。34・35・37・39は口縁部である。34の端部はやや外反し、丸くおさめる。器壁は薄い。35は端部を肥厚気味に丸くおさめる。器壁は厚い。単節縄文(RL)を平行に施す。37は端部を肥厚気味に丸くおさめる。外面にはハケミが見られる。39は端部を肥厚気味でやや外反し、丸くおさめる。器壁はやや薄い。

36・38は体部である。36は外面に平行沈線文が見られる。38は無節縄文を施し、外面全体に赤彩が見られる。小片のため、全体の形状等は不明である。

40・41は底部のみ残存する。平坦な底部をもち、器壁はやや厚い。

42は弥生土器の甕である。底部は平坦で、指頭圧痕が見られる。外面にケズリ、内面にヨコハケ、タテハケを施す。

43～62は須恵器である。43・44は蓋である。43は天井部からなだらかに端部へ下り、口縁端部をやや肥厚気味におさめる。9世紀前半のものである。44は体部に弱い稜をもち、口縁端部を肥厚気味におさめる。

45・46は杯である。45は外側へ直斜状に立ち上がり、一部焼膨れが確認できる。46の器壁はやや厚めで、体部下半にやや強い稜をもち、口縁端部は丸くおさめる。

47～52は杯Aである。47は底部のみ残存する。器壁は厚く、外面は回転ヘラ切後未調整である。48は体部が内湾気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部外面は回転ヘラ切後未調整である。49は体部が直斜状に立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部外面は回転ヘラ切後未調整である。50・51はいずれも焼成がやや悪く、表面に磨滅が見られる。体部は直斜状に立ち上がり、底部外面は回転ヘラ切後未調整である。52の体部はやや丸みをおびながら外側へ開き、口縁端部を丸くおさめる。底部外面は回転ヘラ切後未調整である。

53～58は杯Bである。53は底部のみ残存し、幅の狭い高台をもち、54は体部が直斜状に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部外面には、外側へ開く低い高台が貼り付けられる。55は体部が直斜状に立ち上がり、口縁端部はやや外反する。底部外面にはしっかりと接地する高台をもち、56は体部が直斜状に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部内面には不整方向のナデが見られる。57は体部が丸みをおびながら外側へ開き、口縁端部はやや外反する。底部の器壁は厚く、外面には外側へ開く低い高台をもち、58は体部がやや丸みをおびながら外側へ開き、口縁端部を丸くおさめる。底部外面には、外側へ開く低い高台が貼り付けられる。

59は高杯である。体部は外側へ緩やかに開きながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。底部外

面には、外側へ緩やかに広がる脚をもつ。内外面に降灰がみられ、特に内面の調整が不明瞭である。8世紀後半のものとみられる。

60～62は甕である。60は肩部からくの字状に外側へ開く口縁をもつ。外面にタタキ目、内面に同心円状のあて具痕がみられる。61は頸部である。内面にあて具痕がみられる。62は体部である。外面にタタキ、内面に青海波文のあて具痕がみられる。内面には一部焼き膨れもみられる。

63～66は土師器である。63は椀である。底部外面に回転糸切痕がみられる。焼成不良のため、色調はぶい橙色である。

64は甕の口縁部である。肥厚気味の端部を丸くおさめる。器壁は厚い。

65は十師質土器である。外面には、径1.9cmほどの突起が貼り付けられる。突起の中心には、小さな凹みがみられる。また、穿孔の一部と思われる欠けが確認できる。器種は不明である。

66は焼成がやや不良のため、表面は磨滅し、調整も不明瞭である。表面の所々には赤彩の痕跡が残る。また、底部外面には脚の痕跡とみられる剥離痕があり、高杯もしくは高盤の可能性が考えられる。

67は縄文土器、鉢の底部である。内外面にナデを施す。

68～70は土製品である。68・69は土鉢である。68は両端部の孔を斜めにそくように欠損している。69は両端部が一部欠損する。断面は円形である。

70は土玉である。表面にはケズリが施され、円滑に仕上げられる。下面の欠損が人為的なものか不明である。

SD57 (第17図、写真図版16)

71は須恵器の蓋である。天井部は平坦で、外面には一方向のナデが確認できる。口縁端部は下方へ短く屈曲させる。内面全体に墨痕がみられ、転用碗の可能性がある。

SD58 (第17図、写真図版18)

72は須恵器の蓋である。擬宝珠つまみのみ残存する。

SD64 (第17図、写真図版18)

73は須恵器の杯である。内外面に回転ナデが施される。小片のため、全体の形状等は不明である。

74は磁器の皿である。内外面に釉薬が施されるが、高台端部のみ露胎である。

SD65 (第17図、写真図版18)

75・76は土師器である。75は椀の底部である。調整は不明瞭である。小片のため、全体の形状等は不明である。

76は甕の口縁部である。肥厚気味の端部を丸くおさめる。内外面ともにナデを施す。

SD66 (第17図、写真図版18・22)

77～81は須恵器である。77・78は蓋である。77は天井部の器壁が厚い。内外面に降灰があり、調整は不明である。78は天井部からなだらかに端部へ下る。口縁端部は下方へ短く屈曲させる。

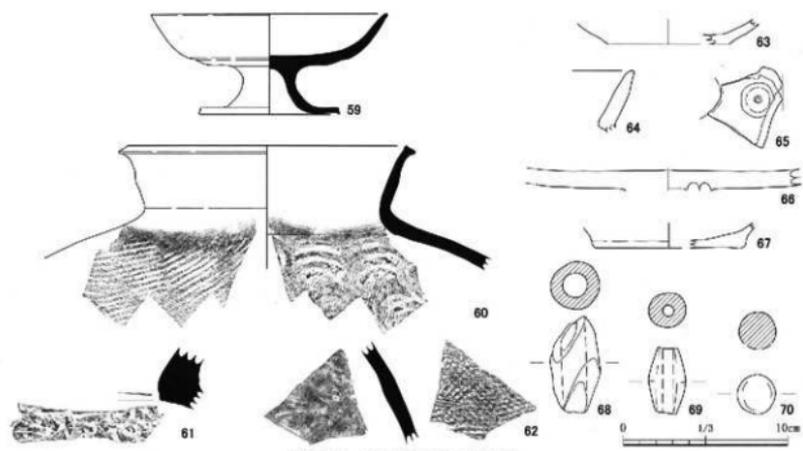
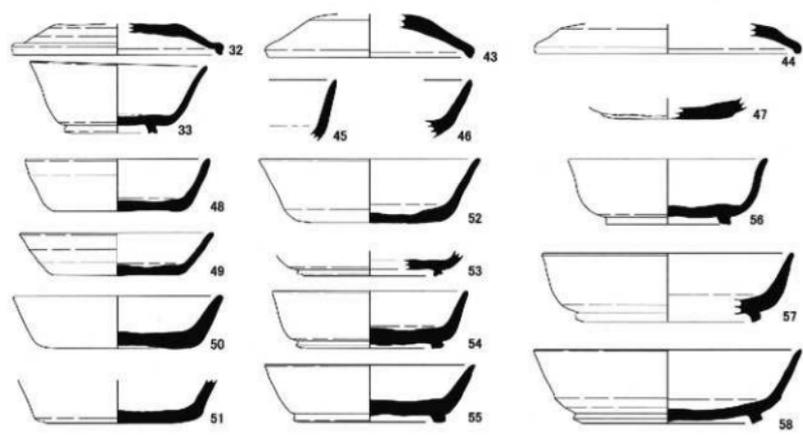
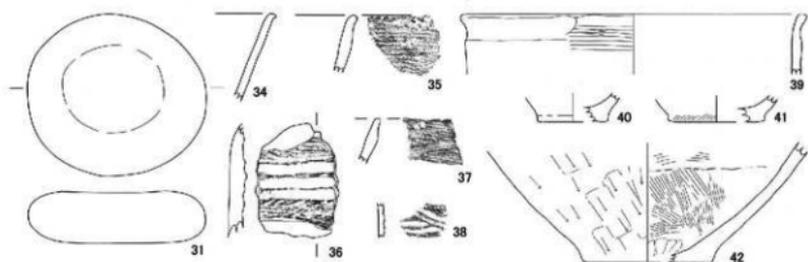
79～81は杯Bである。79は底部のみ残存する。外面には、やや外側へ広がる低い高台をもつ。80は体部が丸みをおびながら外側へ立ち上がり、高台はやや内側に付けられる。81は丸みをおびながら外側へ開く体部をもち、底部外面には外側へ開く高台をもつ。

82は甕である。頸部外面に波状文、肩部内面に同心円状のあて具痕がみられる。口縁端部は欠損する。

83は越中瀬戸の皿である。内外面に施釉し、見込には輪トチの痕跡がみられる。

84は珠洲焼の片口鉢である。外面に回転ナデ、内面に10条1単位の播目がみられる。

85は陶器の片口鉢である。内外面に回転ナデを施す。内面に1単位6条以上の播目がみられる。



第16图 2区遺構出土遺物(1)

SD68 (第17図、写真図版21)

86・87は石器である。86は敲石である。上面が一部欠損している。表面に敲打痕が認められる。

87は砥石である。断面は方形である。上下2面に砥痕が認められるが、そのうち1面は部分的に使用したと考えられる。

SD69 (第17図、写真図版18)

88・89は須恵器である。88は杯Aである。体部は丸みを帯びながら外側へ開く。器壁は薄い。9世紀前半のものである。

89は甕である。口縁部は肥厚気味で、端部を丸くおさめる。体部外面の下半にタタキ後カキメ、内面に同心円状のあて具痕がみられる。内外面とも回転ナデを施す。

SD70 (第17図、写真図版18)

90～92は須恵器である。90は蓋である。器壁はやや厚く、口縁部にかえりをもつ。7世紀後半のものである。

91・92は杯である。91は体部が緩やかに外側へ開きながら立ち上がる。口縁端部はややとがり気味である。92の体部は緩やかに外側へ開きながら立ち上がる。器壁はやや厚く、口縁端部を丸くおさめる。

93は土師器の甕である。口縁部のみ残存する。器表面が磨耗しているため、調整は不明瞭である。

SD73 (第17図、写真図版19・21)

94～97は須恵器である。94は蓋である。つまみから天井部の一部のみ残存する。宝珠形つまみをもつ。

95・96は杯である。95は杯Aである。底部のみ残存し、外面は回転ヘラ切後未調整である。

96は杯Bである。底部のみ残存し、外面に内側へ張り出す高台が付く。全体に降灰があり、調整は不明瞭である。

97は甕である。口縁部のみ残存する。内面に降灰があり、外面の一部にはタールが付着する。

98は砥石である。断面は方形である。上面のみ擦痕が認められる。下面には、砥石を切り出す際の切断痕が残る。

99は越中瀬戸の小皿である。外面から内面上部にかけて施釉する。

SD76 (第17・18図、写真図版19・21・22)

100～116は須恵器である。100～103は蓋である。100・101はつまみから天井部のみ残存する。102は天井部の器壁が厚く、擬宝珠つまみをもつ。全体に焼き膨れ、歪みが大きい。103は天井部の器壁がやや厚く、天井部からなだらかに端部へ下る。口縁端部は内側の下方へ短く屈曲させる。

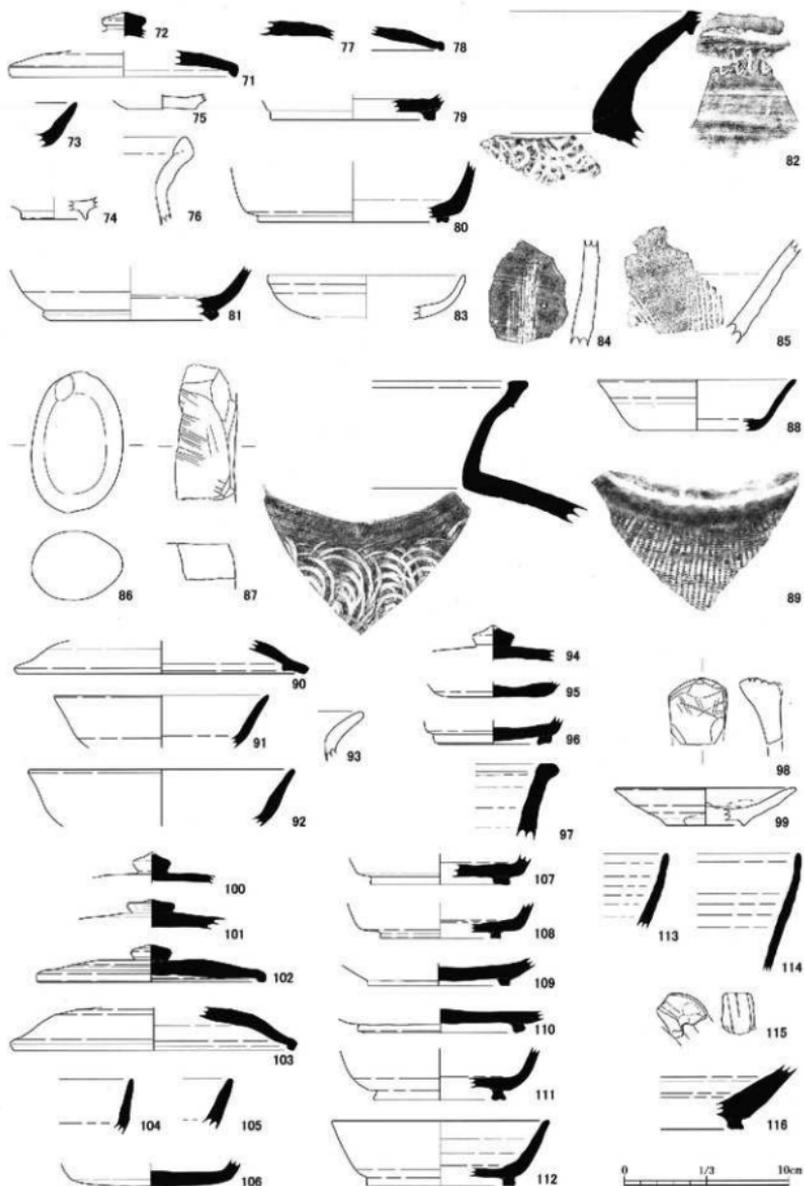
104・105は杯である。いずれも口縁部のみ残存する。

106は杯Aである。底部のみ残存する。底部外面は回転ヘラ切後未調整である。

107～112は杯Bである。107は体部外面に降灰がみられ、底部外面には扁平な高台が貼り付けられる。108は体部が丸みを帯びながら外側へ開く。高台はやや内側に付けられ、端部はしっかり接地する。109は器壁がやや厚く、体部が直線的に外側へ開く。110は底部のみ残存する。器壁はやや厚く、外側へ張り出す高台をもつ。全体に降灰及び、焼膨れがみられる。111は体部が丸みを帯びながら外側へ開く。底部外面にはやや高い高台をもつ。112は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部外面にはしっかりと接地する高台をもつ。

113・114は鉢である。いずれも器壁は薄く、やや内湾気味に立ち上がる。表面には細かい単位の輪積痕と、強い回転ナデの痕跡が確認できる。

115・116は瓶である。115は双耳瓶の耳である。外面には自然軸がかり、背面及び下端面にヘラ状



第17图 2区遺構出土遺物(2)

工具で十字の切り込みを入れる。116は底部である。器壁は厚く、内面には輪積痕と強い回転ナデが明瞭に残る。底部外面には外側へ開く低い高台をもつ。

117は甕である。口縁端部はやや上下に突出する。体部外面にタタキ後カキメ、内面に同心円状のあて具痕がみられる。

118～121は土師器である。118・121は碗である。118は口縁部のみ残存する。摩滅のため不明瞭であるが、赤彩がみられる。121は底部である。外面に糸切痕が残る。

119・120は甕である。いずれも口縁部のみ残存する。全体の形状は不明である。119は内外面とも回転ナデが施され、端部を内側に屈曲させる。120は器壁が肥厚気味で、内外面ともに回転ナデが施される。

122・123は石器である。122は砥石である。断面は方形である。全面に砥痕が認められる。下部に砥石を製作する際の切断痕が残されている。

123は凹石である。上面の中央部に直径約2.0cm、深さ0.5～0.7cmの凹みをもつ。

124～128は陶磁器である。いずれも近世以降のものである。124は皿である。内外面に施軸するが、口縁部の一部が露胎である。

125・128は越中瀬戸の碗である。125は底部のみ残存し、見込に鉄軸がかかる。外面には削り出し高台をもつ。128は外面の一部と、見込全体に鉄軸が施される。底部外面には糸切痕がみられる。

126は肥前産の陶胎染付である。内外面に釉薬を施すが、高台端部は露胎である。体部外面に草花文が描かれ、その上下を挟むようにして圏線がめぐる。

127は天目である。内外面に鉄軸を施し、やや内湾する体部をもつ。

SD78 (第18図、写真図版18)

129は須恵器の杯Bである。底部の一部のみ残存し、器壁は厚い。内外面に回転ナデが施される。小片のため、全体の形状等は不明である。

SE56 (第15図、写真図版22)

130は曲物である。薄板を二重に巻いて、それぞれを木釘で留めている。内面上部に1カ所、径1.2cmの穿孔がみられる。内面には、0.5～1.0cmの縦平行線を刻む。中心は割れて欠損している。また、本製品では樹種同定と放射性炭素年代測定を行った。結果、スギ材を使用した11～12世紀以降のものであることがわかった。

131・166は甕である。131は全体にケズリ痕がみられ、持ち代を欠損する。166は全体にケズリ痕がみられ、先端を欠損する。いずれも断面は楕円形である。

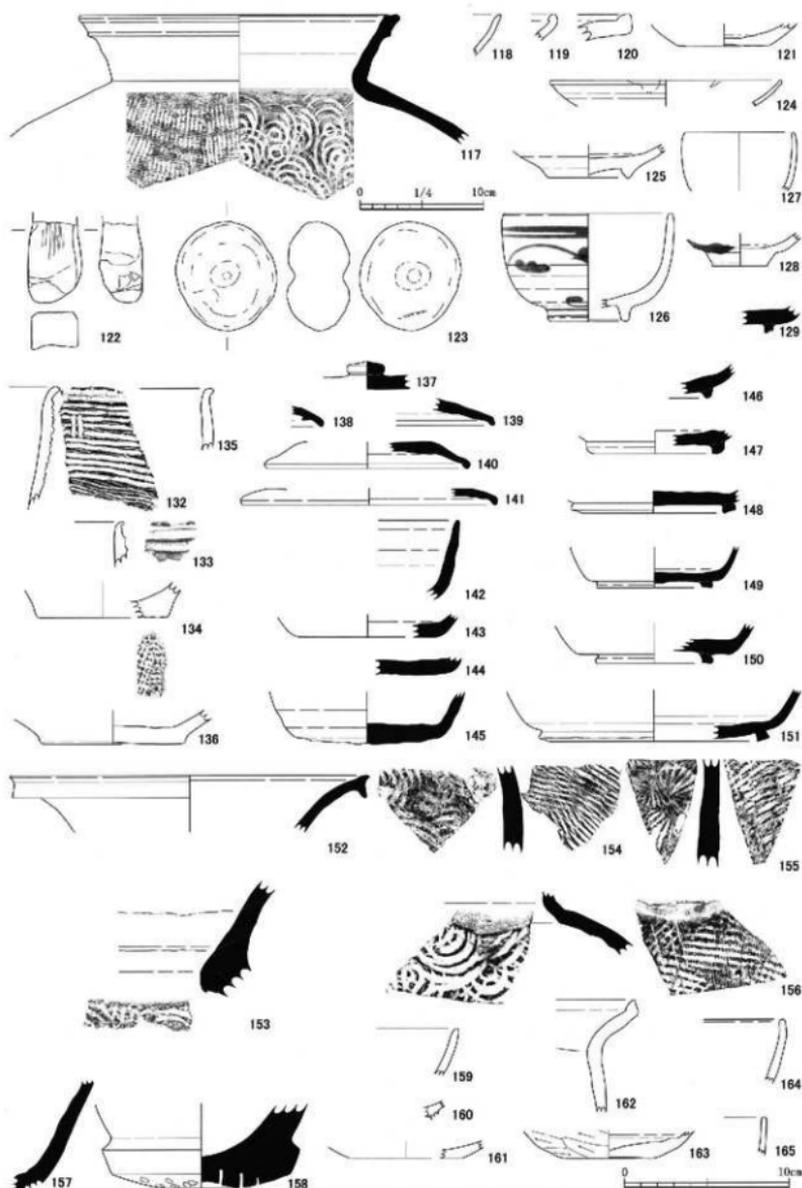
2. 表土・攪乱出土遺物 (第18図、写真図版16・20・22)

縄文土器 (132～136)

132・133・135は鉢の口縁部である。132は横位に沈線文を施す。内面はナデが施される。133は口縁部下に横位に2条の沈線文を施す。横方向にはヘラムガキを施す。135は外面上部と内面全体にナデを施す。134は底部のみ残存する。内外面にナデを施し、底部外面には網代痕がみられる。136は内外面にナデを施す。底部外面は未調整である。

須恵器 (137～158)

137～141は甕である。137はやや扁平なつまみと、天井部の一部が残存する。138は口縁端部にかえりをもつ。7世紀後半のものである。139は小片であるが、外面全体に回転ヘラケズリを施す。140は天井部が平坦で、稜の弱い肩からなだらかに端部へ下る。口縁端部は下方へ短く屈曲させる。141は体部の稜が弱く、全体的に丸みをおびた形状となる。口縁端部は丸くおさめる。



第18圖 2区遺構・表土・攪乱出土遺物

142～151は杯である。142～145は杯Aである。142はやや厚めの器壁をもち、口縁端部は丸くおさめらる。143・144は底部のみ残存する。いずれも底部外面は回転ヘラ切後未調整である。145は体部がやや丸みをおびながら外側へ立ち上がる。底部外面は回転ヘラ切後未調整である。全体的にやや焼歪みがみられる。

146～151は杯Bである。146は底部のみ残存する。外側へ張り出す高台をもつ。小片のため、全体の形状等は不明である。147は底部のみ残存する。やや厚めの器壁をもち、外面には内側へ張り出す高台をもつ。148は底部のみ残存する。器壁はやや厚めで、外面には外側へ張り出す高台をもつ。内面には墨痕がみられ、転用碗の可能性もある。149は体部がやや丸みをおびながら外側へ開く。底部外面には一方向のナデを施す。150は底部外面にナデが施されるが、一部未調整である。151は体部がやや丸みをおびながら外側へ開く。底部は平坦で、外面に外側へ開く低い高台が貼り付けられる。

152～155は甕である。152は口縁部である。内外面に回転ナデを施し、口縁部は上下に突出する。153は頸部である。内外面ともに回転ナデを施す。頸部下にはあて具痕がみられる。154・155は体部である。いずれも外面にタタキ、内面にあて具痕がみられる。

156は横瓶である。外面にタタキ後カキメ、内面に同心円状のあて具痕がみられる。内面に自然釉が掛かる。

157は瓶である。体部はやや直線的に外側へ開く。内面には輪積痕と強い回転ナデが明瞭にみられる。口縁端部と高台は欠損している。

158は鉢である。内外面とも回転ナデが施される。やや丸みをおびる底部には、竹管状工具による多数の刺突痕がみられる。

土師器 (159～163)

159は碗の口縁部である。端部は丸くおさめられ、内外面に赤彩が施される。小片のため、全体の形状等は不明である。

160・161は皿の底部である。全体に回転ナデが施される。小片のため、全体の形状等は不明である。161は外面にケズリ、内面にナデを施す。小片のため、全体の形状等は不明である。外面にケズリがみられるため、甕の可能性もある。

162・163は甕である。162は外面全体と内面上部に回転ナデ、内面下部にナデが施される。口縁部はくの字状に外側へ開き、外面上部には煤が付着している。163は底部である。内面に輪積痕がみられ、外面にケズリを施す。

陶磁器 (164・165)

いずれも近世以降の碗である。164は瀬戸美濃、天目碗である。内外面に鉄釉を施す。165は種別不明の陶磁器である。内外面に青灰色・黄褐色の釉薬を施す。

第1表 1区出土遺物観察表

土器

掲載番号	出土遺物	部位	種別	形種	口径	底径	器高	色観	胎土	旋成	外面	内面	備考
1	SK42	1層	土師器	甕	-	-	2.4	にぶい黄褐色	やや粗粒多量	良	不明瞭	回転ナデ	
2	SK50	1層	須恵器	蓋	-	-	(1.4)	灰黄褐色	密	良	回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ	欠けが多い
3	SK26	1層	須恵器	杯A	-	(8.0)	(1.1)	灰褐色	密	良	回転ナデ 回転ヘラ切	回転ナデ	
4	SK53	1層	須恵器	杯A	-	(8.0)	(1.9)	にぶい黄	密粒中量	良	回転ナデ切 回転ナデ	回転ナデ 付トナデ?	
5	SK54	1層	須恵器	蓋	-	-	2.4	灰白	良	良	回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ 一方方向ナデ	扁平なつまみ
6	SK25	1層	須恵器	杯	-	-	2.1	灰白	密	良	回転ナデ	回転ナデ	端部は穴気味
7	SK25	1層	須恵器	杯A	-	-	1.3	浅黄	やや粗	やや不良	回転ナデ切 回転ナデ	回転ナデ	
8	SK54	1層	須恵器	杯	8.5	-	(3.3)	灰	密	良	回転ナデ 回転ヘラ削り か?	回転ナデ	内外面両灰 層黄灰色を呈する
9	SK54	1層	須恵器	瓶	-	7.5	1.4	灰白	密	良	回転ナデ削り	回転ナデ	外面転用硬か
10	SK54	1層	八尾	甕	-	-	(5.0)	灰白	密	良	回転ナデ切 回転ナデ	指頭痕 回転ナデ	焼き割れ、内外面に薄灰 内外面に黄の焼跡を
11	SK54	底面	ガラス	-	(長さ) 3.0	(幅) 2.9	(厚さ) 0.6	透明	-	-	-	-	気泡が入る 中央部に異質箇所有り
12	SD16	1層	須恵器	蓋	-	-	(0.9)	灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	口縁部のみ残存
13	SD16	1層	須恵器	杯	-	-	(1.8)	灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	口縁部のみ残存
14	B3	覆瓦	須恵器	蓋	14.7	-	(1.3)	黄灰	密	良	回転ナデ削り 回転ナデ	回転ナデ	口縁部欠け 内外面の調整不明瞭
15	B2	表土	須恵器	蓋	(16.0)	-	(2.3)	灰	密粒微量	良	回転ナデ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	口縁部に欠け
16	B3	表土	須恵器	杯	-	-	(2.7)	灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
17	B3	表土	須恵器	杯	-	-	(3.5)	灰白	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
18	B3	覆瓦	須恵器	杯A?	12.0	-	3.0	灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ 指頭痕	口縁部は丸くおさめる
19	B3	表土	須恵器	皿	-	(7.0)	(1.4)	灰黄褐色	密	良	回転ナデ切 回転ナデ	回転ナデ	
20	B2	表土	須恵器	杯A	-	(9.0)	(1.2)	淡黄	密粒微量	不良	回転ナデ?	回転ナデ?	焼成不良 内外面の調整不明瞭
21	SK20	1層	須恵器	杯A	12.0	5.0	3.2	灰白	密	良	回転ナデ切 回転ナデ	回転ナデ	
22	SD43	1層	須恵器	杯B	-	(5.2)	(1.9)	黄灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
23	SD44	1層	須恵器	短頸壺	-	-	(3.6)	黄灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	口部外面に薄灰
24	SK35	1層	須恵器	瓶	-	-	(2.3)	灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	口部外面に沈線1条
25	SK36	1層	須恵器	瓶	-	-	(2.0)	灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
26	B3	覆瓦	須恵器	瓶	-	5.2	3.6	灰白	密	良	回転ナデ 回転ナデ切	回転ナデ	外面に薄灰
27	B3	覆瓦	須恵器	鉢?	-	-	(4.6)	灰白	密	良	回転ナデ	不明	内面薄灰 調整不明
28	B2	表土	土師器	甕	-	-	(3.0)	黄	密粒中量	良	ナデ	ナデ	外面にハゲ目?
29	B3	表土	土師器	甕	-	-	(2.9)	淡黄	やや粗粒中量	良	回転ナデ	回転ナデ	

石器

掲載番号	出土遺物	部位	種別	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	石材	備考
30	B3	表土	石器	磨製石斧	7.7	4.5	2.0	102.2	-	上面に縦溝にはしる磨擦痕 下面は欠け部分多数有り

第2表 2区出土遺物観察表

土器・陶磁器

掲載 番号	出土 遺物	層位	種別	器種	口径	底径	器高	色別	胎土	焼成	外面	内面	備考
32	SK80	1層	須恵器	蓋	12.6	-	(1.9)	灰白	密 須粒 少量	良	回転ナデ ヘラ切	回転ナデ	口縁端部は肥厚気味
33	SK80	5層	須恵器	杯B	10.7	5.6	4.4	灰	密 須粒 微量	良	回転ナデ ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	口縁根付着 灯明具として使用か
34	SD55	1層	縄文	鉢	-	-	-	明灰 成粒	密 須粒 中量	良	ナデ	ナデ	
35	SD55	1層	縄文	鉢	-	-	(3.5)	にぶい 黄粒	密 須粒 中量	良	ナデ	-	
36	SD55	3層	縄文	鉢	-	-	(7.0)	やや密 粒中量	密 須粒 中量	良	-	ナデ	
37	SD65	1層	縄文	鉢	-	-	(2.8)	橙	密 須粒 中量	良	-	-	富山市教委2002 古岡・経力の208を参照
38	SD65	3層	縄文	鉢	-	-	(2.1)	橙	密 須粒 少量	良	-	-	表面赤彩
39	SD65	1層	縄文	鉢	21.0	-	(3.7)	橙	やや粗 密 須粒 多量	良	指ササエ	-	
40	SD65	1層	縄文	鉢	-	(4.2)	(1.8)	橙	密 須粒 多量	良	ナデ	ナデ	
41	SD65	-	縄文	鉢	-	(5.8)	(1.7)	にぶい 黄粒	やや粗 密 須粒 多量	良	ナデ	ナデ	
42	SD55	3層	弥生	甕	-	7.9	7.3	灰黄褐	やや粗	良	八ヶ、削り 指須圧痕 底外未調整	ハケ目	
43	SD55	1層	須恵器	蓋	12.0	-	(2.6)	灰	密	良	回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	口縁端部は丸くおさめる
44	SD55	1層	須恵器	蓋	16.0	-	1.8	褐灰	密	良	回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	口縁端部は丸くおさめる 外面に降灰
45	SD55	1層	須恵器	杯	-	-	(3.7)	褐灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	焼き割れ
46	SD55	1層	須恵器	杯	-	-	3.5	褐灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	口縁端部はとがり気味
47	SD55	1層	須恵器	杯A	-	(8.0)	(1.3)	灰白	密	良	回転ヘラ切	回転ナデ	
48	SD55	1層	須恵器	杯A	11.4	7.9	3.2	灰	密	良	回転ヘラ切	回転ナデ 仕上げナデ	体部内面に指痕痕
49	SD65	2層	須恵器	杯A	12.0	(8.6)	2.6	灰	良	良	回転ナデ 回転ヘラ切	回転ナデ	口縁部内外面に降灰
50	SD65	1層	須恵器	杯A	12.8	(接地面) 4.2	3.2	橙	密 須粒 少量	やや 不良	回転ナデ 回転ヘラ切	回転ナデ	牛糞け
51	SD65	1層	須恵器	杯A	-	(接地面) 6.5	(2.7)	橙	密 須粒 微量	やや 不良	回転ナデ 回転ヘラ切	回転ナデ	調整不明瞭
52	SD65	1層	須恵器	杯A	13.4	8.8	3.9	黄灰	密 須粒 少量	やや 不良	回転ナデ 回転ヘラ切	回転ナデ 仕上げナデ	
53	SD65	1層	須恵器	杯B	-	(8.0)	(1.5)	黄灰	密 須粒 微量	良	回転ナデ	回転ナデ	
54	SD65	3層	須恵器	杯B	12.0	9.0	3.5	灰黄橙	密 須粒 微量	やや 不良	回転ナデ 回転ヘラ切	回転ナデ 仕上げナデ	焼き割れ
55	SD65	1層	須恵器	杯B	12.8	9.2	3.5	灰	密 須粒 微量	良	回転ナデ 回転ヘラ切	回転ナデ 仕上げナデ	
56	SD55	2・3層	須恵器	杯B	12.0	(接地面) 7.5	4.0	黄灰	密	やや 不良	回転ナデ 回転ヘラ切	回転ナデ ナデ	
57	SD55	1層	須恵器	杯B	15.2	10.2	4.2	黄灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
58	SD55	1層	須恵器	杯B	16.0	10.4	4.5	灰	密	良	回転ナデ 回転ヘラ切	回転ナデ	体部下半の縁が明確 調整不明瞭
59	SD65	1・2層	須恵器	高杯	14.3	8.6	6.2	灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	内外面に降灰 内面調整不明瞭

掲載番号	出土遺構	層位	種別	器種	口径	底径	高さ	色調	胎土	焼成	外面	内面	備考
60	SD65	1・3層	須恵器	甕	18.0	-	(7.6)	灰	密	良	回転ナデ タタキ	回転ナデ あて具痕	内外面に降灰
61	SD65	3層	須恵器	甕	-	-	(3.7)	灰白	密	良	回転ナデ	回転ナデ あて具痕	外面に降灰
62	SD65	2層	須恵器	甕	-	-	(6.0)	褐灰	密	良	タタキ	あて具痕	内面に焼き跡 外面に降灰
63	SD65	1層	土師器	椀	-	7.2	(1.5)	にぶい 橙	やや粗	不良	回転ナデ	回転ナデ 回転糸切痕?	
64	SD65	1層	土師器	甕	-	-	(4.1)	にぶい 黄橙	筋 粒粒 中量	良	不明	不明	外面スス付着 調整不明瞭
65	SD65	1層	土師器 土器?	不明	-	-	-	灰黄橙	密	良	ナデ	ナデ	径1.9cmの突起を貼り付け 穿孔を施す
66	SD65	1層	土師器	高盤	-	-	(1.2)	橙	良	やや 不良	ナデ	ナデ	赤彩
67	SD65	1層	調文	鉢	-	(9.0)	(1.5)	にぶい 橙	筋 粒粒 多量	良	ナデ	ナデ	
71	SD67	1層	須恵器	蓋	(14.0)	-	(1.6)	灰	密	良	回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ	内面に墨痕
72	SD68	1層	須恵器	蓋	-	-	(1.5)	灰	密	良	ナデ	不明	つまみのみ残存
73	SD64	1層	須恵器	杯	-	-	(2.7)	暗赤褐	密	良	回転ナデ	回転ナデ	口縁端部はとがり気味
74	SD64	1層	磁器	碗	-	4.0	(1.4)	淡黄橙	密	良	回転ナデ	回転ナデ	内外面に荒粉
75	SD65	1層	土師器	椀	-	4.2	(0.9)	にぶい 橙	密	良	回転ナデ	回転ナデ	調整不明瞭
76	SD65	2層	土師器	甕	-	-	(5.4)	橙	密	良	回転ナデ	回転ナデ	口縁意図的に打欠きか
77	SD66	1層	須恵器	蓋	-	-	(1.2)	灰	密	良	不明	不明	内外面に降灰、調整不明
78	SD66	1層	須恵器	蓋	-	-	(1.4)	褐灰	密	良	回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ	
79	SD66	2層	須恵器	杯B	-	(10.0)	(1.6)	灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
80	SD66	1層	須恵器	杯B	-	11.5	(3.7)	灰	密	良	回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ	
81	SD66	1層	須恵器	碗	-	9.7	(3.3)	灰白	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
82	SD66	1層	須恵器	甕	-	-	(7.0)	黄灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	内面にあて具痕 胴部に波状文 内外面に降灰
83	SD66	2層	越中 瀬戸	皿	1.2	-	(2.5)	暗灰黄	密	良	回転ヘラ削り	回転ナデ	内外面に施施、輪トナ裏
84	SD66	1層	珠洲	片口鉢	-	-	6.5	灰褐	密	良	回転ナデ	回転ナデ	径目：1.5cm幅10条
85	SD66	1層	越中 瀬戸	片口鉢	-	-	(6.3)	褐灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	内面に6本以上の横目
88	SD69	1層	須恵器	杯	(12.0)	(7.0)	3.1	オリブ 灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
89	SD69	1層	須恵器	甕	-	-	-	灰	筋 粒粒 中量	良	回転ナデ タタキ	回転ナデ あて具痕	
90	SD70	1層	須恵器	蓋	(17.8)	-	(2.0)	灰褐	密	良	回転ヘラ削り	不明	内外面に降灰 調整不明瞭 口縁部にかえり
91	SD70	2層	須恵器	杯	(13.0)	-	(3.2)	褐灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	焼き跡、口縁先端は とがり気味
92	SD70	2層	須恵器	杯	(16.0)	-	(3.5)	褐灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	焼き跡
93	SD70	2層	土師器	甕	-	-	(3.0)	淡橙	やや粗 粒粒 中量	良	ナデ ハケ目?	ナデ ハケ目?	赤生か?
94	SD73	1層	須恵器	蓋	-	-	(1.9)	灰	密	良	ナデ 回転ナデ	ナデ	つまみのみ残存
95	SD73	1層	須恵器	杯A	-	(6.4)	(0.9)	灰白	密	良	回転ナデ 回転ヘラ切	回転ナデ	
96	SD73	2層	須恵器	杯B	-	7.1	(1.5)	灰	筋 粒粒 少量	良	回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	外面に降灰 内外面調整不明瞭 内面黒炭痕用

掲載 番号	出土 遺構	層位	類別	器種	口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	外面	内面	備考
97	SD73	1層	須恵器	甕	-	-	(4.6)	灰白	密 粒約 微量	良	回転ナデ	回転ナデ	内面に降灰 外面にケール付着
99	SD73	1層	越中 瀬戸	碗	(11.0)	(4.7)	2.3	赤	密	良	回転ナデ	回転ナデ	内外面に施釉
100	SD76	1層	須恵器	蓋 (鳥人住) (7.4)	-	-	(1.8)	灰白	密	良	回転ナデ	ナデ	内面調整不明瞭
101	SD76	1層	須恵器	蓋 (つまみ 器) 2.4	-	-	(1.8)	黄灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	外面に降灰
102	SD76	1層	須恵器	蓋 (つまみ 器) 2.4	-	-	2.3	褐灰	密 粒少 量	良	仕上ナデ 回転ナデ	回転ナデ	焼き跡、外面に降灰 焼き込み
103	SD76	1層	須恵器	蓋	-	17.0	2.6	灰	密	良	回転ナデ 回転ヘラ切	回転ナデ	
104	SD76	3層	須恵器	杯	-	-	(3.4)	灰白	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
105	SD76	3層	須恵器	杯	-	-	(3.1)	灰白	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
106	SD76	1層	須恵器	杯A	-	8.0	(1.4)	灰白	密	良	回転ナデ 回転ヘラ切	回転ナデ	
107	SD76	3層	須恵器	杯B	-	(8.4)	(1.9)	灰白	密	良	回転ナデ	回転ナデ 仕上ナデ	外周に降灰
108	SD76	1層	須恵器	杯B	11.2	7.3	2.2	灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
109	SD76	1層	須恵器	杯B	-	8.6	(1.3)	黄灰	密	良	回転ヘラ切 回転ナデ	回転ナデ	
110	SD76	2層	須恵器	杯B	-	9.0	(0.9)	黄灰	密	良	回転ナデ 回転ヘラ切	回転ナデ	全体に降灰 焼き跡
111	SD76	3層	須恵器	杯B	-	(8.0)	(3.2)	褐灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
112	SD76	1層	須恵器	杯B	13.0	8.8	4.0	灰白	密	良	回転ナデ 回転ヘラ切	回転ナデ	
113	SD76	3層	須恵器	鉢	-	-	(4.6)	灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
114	SD76	3層	須恵器	鉢	-	-	(7.2)	灰	密 粒少 量	良	回転ナデ	回転ナデ	口縁内面に降灰
115	SD76	3層	須恵器	双耳瓶	-	-	(2.8)	灰	密	良	ヘラ削り 指オサエ	回転ナデ	耳のみ残存、降灰、 首に十字の切り込み
116	SD76	3層	須恵器	瓶	-	-	(3.9)	灰白	密	良	回転ナデ ヘラ削り ナデ	回転ナデ	内外面に降灰
117	SD76	1層	須恵器	甕	25.5	-	(7.7)	黄灰	密	良	回転ナデ タタキ	回転ナデ あて具	内外面に降灰
118	SD76	1層	土師器	椀	-	-	(2.5)	浅黄褐色	やや粗	良	回転ナデ	回転ナデ	表面面に赤彩か
119	SD76	1層	土師器	甕	-	-	(1.6)	黄	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
120	SD76	3層	土師器	甕	-	-	(1.6)	にぶい 黄	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
121	SD76	1層	須恵器	椀	-	(5.5)	(1.4)	灰黄	密	良	回転ナデ 糸切痕?	回転ナデ	
124	SD76	1層	不明 磁器	皿	(14.0)	-	(1.6)	灰白	密	良	回転ナデ	回転ナデ	内外面に施釉
125	SD76	3層	越中 瀬戸	皿	-	(4.8)	(2.0)	にぶい 黄	密	良	削り ナデ	回転ナデ	内面に施釉、内売げ
126	SD76	3層	陶胎 染付	碗	(10.0)	(4.6)	6.6	灰	密	良	無釉	回転ナデ?	内外面に施釉 外面に草花文
127	SD76	3層	不明 陶器	碗	(6.6)	-	(3.6)	明黄褐色	密	良	回転ナデ	回転ナデ	内外面に施釉
128	SD76	3層	越中 瀬戸	皿	-	3.4	(2.0)	黄	密	良	回転ナデ 糸切痕	回転ナデ	
129	SD78	1層	須恵器	杯B	-	-	(1.7)	灰白	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
132	E10	2層	縄文	深鉢	-	-	(7.6)	にぶい 黄褐色	やや粗	不良	糸織文	ナデ	
133	SD57	1層	縄文	浅鉢	-	-	(2.8)	黄	密	良	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
134	F10	2層	縄文	鉢	-	(7.8)	(2.2)	明赤褐色	やや粗	良	ナデ	調整不明	底外周に縄文痕

掲載番号	出上遺構	層位	種別	形種	口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	外面	内面	備考
135	F9	2層	縄文	深鉢?	-	-	(3.8)	にぶい黄緑	密粒少量	良	ナデ ハケ	ナデ	
136	F9	2層	縄文	壺		8.8	(2.1)	黄緑	密粒多量	良	ナデ	ナデ	底部未調整
137	E7	2層	須恵器	蓋	-	-	(1.7)	灰	密	良	回転ナデ	不明	内面調整不明
138	D8	2層	須恵器	蓋	-	-	(1.2)	灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	外面に降灰 内面にかえり
139	SK63	-	須恵器	蓋			1.6	黄灰	密	良	回転ヘラ削り	回転ナデ	
140	D8	2層	須恵器	蓋	(12.1)	-	(1.7)	灰白	密	良	回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ	外面に降灰
141	E7	2層	須恵器	蓋	15.6	-	1.0	灰	密	良	不明	回転ナデ	外面に降灰
142	SK63	-	須恵器	杯	-	-	(4.8)	黄灰	密粒数多	良	回転ナデ	回転ナデ	
143	SK63	1層	須恵器	杯A	-	8.4	(1.4)	灰白	密	良	回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ	
144	E9	2層	須恵器	杯A	-	-	(1.0)	オリーブ灰	密	良	回転ヘラ削り	回転ナデ	
145	E7	攪乱	須恵器	杯A	10.8	7.6	3.2	灰白	密粒少量	良	回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ	
146	E8	2層	須恵器	杯B	-	-	(1.7)	灰白	密	不良	回転ナデ	回転ナデ	
147	E9	表土	須恵器	杯B	-	-	1.4	灰	密	良	回転ナデ 回転ヘラ削り	調整不明	
148	E9	2層	須恵器	杯B	-	-	1.9	黄灰	密	良	回転ナデ ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	内面に盛度、転用痕 底外に爪形凹痕
149	E7	攪乱	須恵器	杯B	-	(7.0)	(2.5)	オリーブ灰	密	良	回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ 仕上げナデ	
150	E7	攪乱	須恵器	杯B	-	(7.0)	(2.4)	灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
151	D8	表土	須恵器	杯B	-	12.6	(3.2)	黄灰	密	良	回転ナデ 仕上げナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ	
152	D7	表土	須恵器	美	(19.0)	-	(3.4)	灰	密	良	不明	不明	磨滅のため調整不明瞭
153	E8	表土	須恵器	美	-	-	(7.0)	黄灰	密	良	回転ナデ	回転ナデ	あて具痕、外面に降灰
154	E8	2層	須恵器	美	-	-	(5.4)	暗灰	密	良	タタキ板	あて具痕	
155	SK63	-	須恵器	美	-	-	(6.5)	灰白	密	良	タタキ板	扇形あて具痕	
156	E10	2層	須恵器	横板	-	-	(3.9)	灰	密	良	回転ナデ タタキ板	回転ナデ あて具痕	
157	E10	2層	須恵器	鉢	-	-	(6.8)	黄灰	密	良	回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ	
158	E8	攪乱	須恵器	鉢	-	(埋地面 4.4)	(5.2)	灰	密	良	回転ナデ	調整不明	外底に竹管状工具による 衝突痕
159	E8	表土	土師器	碗	-	-	(3.0)	浅黄緑	密	良	回転ナデ	回転ナデ	内外面赤彩
160	SK63	-	土師器	皿	-	-	-	黄緑	密	良	回転ナデ	回転ナデ	
161	SK63	-	土師器	皿	-	-	(1.0)	にぶい黄緑	密	良	調整不明	調整不明	
162	E9	2層	土師器	壺	-	-	(6.9)	にぶい黄緑	密粒少量	良	回転ナデ	調整不明	外面上部にスス付着
163	E9	2層	土師器	壺	(10.2)	(5.0)	(1.7)	にぶい黄緑	密	良	ヘラ削り	回転ナデ	
164	F8	表土	瀬戸式土師器	天目碗	-	-	(3.5)	灰白	密	良	回転ナデ	回転ナデ	内外面に施釉
165	F9	2層	不明陶磁器	碗	-	-	(2.4)	灰白 暗オリーブ	密	良	回転ナデ	回転ナデ	内外面に施釉

土製品

掲載 番号	出土 遺構	層位	種別	器種	残存長	残存幅	孔径	色調	胎土	焼成	外面	内面	備考
68	SD65	3層	土製品	土鉢	5.85	3.0	1.4	灰黄褐色	密 粗粒 微量	良	ナデ	-	欠損部多数 重量29.7g
69	SD65	2層	土製品	土鉢	4.1	2.3	0.7	灰黄	南 粗粒 微量	良	ナデ	-	断面はやや楕円 重量17.6g
70	SD65	1層	土製品	上玉	(径) 2.4		(厚) 2.4	灰黄褐色	良	良	刷り	-	欠けは人為的なものか不明 重量9.4g

木製品

掲載 番号	出土 遺構	層位	種別	器種	残存長	残存幅	残存厚	木取	備考
130	SE56	-	木製品	曲物	(高) 34.7	43.3	0.8~ 1.0	楳目	
131	SE56	-	木製品	箸	(14.0)	0.7	0.4	楳目	
166	SE56	-	木製品	箸	(17.8)	0.6	0.4	楳目	

石製品

掲載 番号	出土 遺構	層位	種別	器種	残存長	残存幅	残存厚	重量 (g)	石材	備考
31	SK67	3層	石器	磨石	9.8	10.8	3.0	565.0g	-	
86	SD68	1層	石器	磨石	8.6	5.6	4.2	245.9g	-	
87	SD68	1層	石器	砥石	(8.3)	(3.7)	(2.2)	96.0g	-	
98	SD73	1層	石器	砥石	4.1	3.5	(2.6)	34.9g	-	
122	SD76	3層	石器	砥石	4.9	2.7	2.2	63.4g	-	五面使用か
123	SD76	3層	石器	凹石	6.6	6.1	3.8	183.5g	-	

第V章 理化学的分析

第1節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林敏一
Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎

1. はじめに

富山県富山市に位置する戸塚住吉D遺跡の発掘調査では、古代～中世とされる井戸が検出された。ここではこの井戸の井戸枠を試料として、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。なお、同じ木材を用いて樹種同定も行っている(本章第2節参照)。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは第3表のとおりである。

試料は、2区のグリッドE10のSE56から出土した井戸枠1点である。井戸枠は曲物で、大きく加工されており、最外年輪は確認できなかった。そのため、試料の採取部位が年輪のどの位置にあたるかは不明であった。

試料は調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PI.JD-17620	調査区: 2区 グリッド: E10 遺構: SE56 遺物No.262 その他: 井戸枠(曲物)	試料の種類: 生材(スギ) 試料の性状: 部位不明 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)

第3表 測定試料及び処理

3. 結果

第4表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第19図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期5730 \pm 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

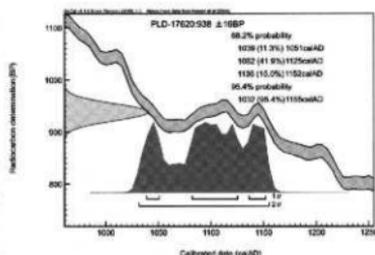
¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.1 (較正曲線データ:INTCAL09)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

測定番号	δ ¹³ C (%)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-17620 遺物No.262	-21.35±0.13	938±16	940±15	1039AD (11.3%) 1051AD 1082AD (41.9%) 1125AD 1136AD (15.0%) 1152AD	1032AD (95.4%) 1155AD

第4表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

4. 考察

井戸杵の暦年代範囲は、1σ暦年代範囲(確率68.2%)が1039-1051cal AD (11.3%)、1082-1125 cal AD (41.9%)、1136-1152cal AD (15.0%)、2σ暦年代範囲(確率95.4%)が1032-1155cal AD (95.4%)であった。2σ暦年代範囲に着目すると、11世紀前半～12世紀中頃で平安時代に相当する。ただし、木材の場合、最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると最外年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料は、最外年輪が確認できず、なおかつスギで年輪の目が細かいため、試料を採取した部位よりも外側に多くの年輪があった可能性を考えなければならない。したがって、井戸杵の材が伐採された年代は、11世紀前半～12世紀中頃より古くなることはないが、それよりも新しい可能性はある。



第19図 暦年較正結果

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

第2節 出土木材の樹種同定

黒沼保子 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

百塚住吉D遺跡は富山市に所在する遺跡である。ここから出土した井戸杵の樹種同定結果を報告する。なお、同じ木材を用いてAMS法による年代測定を行っており、平安時代以降に相当する年代が得られている(本章第1節参照)。

2. 試料と方法

試料は、2区のグリッドE10のSE56から出土した井戸杵1点である。

方法は、剃刀を用いて試料の3断面(横断面・接線断面・放射断面)から切片を採取し、ガムクロールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

3. 結果

樹種同定の結果、針葉樹のスギであった。スギ材は木理直通で割裂性が大きく、比較的軽軟で切削および加工が容易であるため多用途に利用される。特に日本海側の地域では、木製品にスギ材を多用する傾向がある(山田1993)。また、針葉樹は全般的に耐水性が高く水場での利用に適しており、井戸材としても有用である。

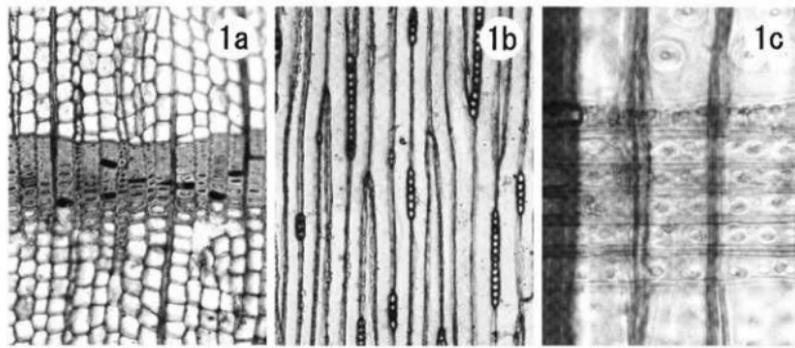
以下に、同定根拠となった木材組織の特徴記載し、顕微鏡写真を第20図に示す。

(1) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 第20図1a-1c

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急か穏やかで、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は主に晩材部に接線状に配列する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に通常2個並ぶ。スギは暖帯～温帯下部に生育する常緑高木である。

引用文献

山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史-。植生史研究特別第1号。242p。日本植生史学会



第20図 出土木材の光学顕微鏡写真

1a-1c.スギ a:横断面(スケール=200 μ m)、b:接線断面(スケール=200 μ m)、c:放射断面(スケール=50 μ m)

第3節 出土動物遺体の同定

中村賢太郎 (ハレオ・ラボ)

1. はじめに

百塚住吉D遺跡は富山市に所在する。百塚住吉D遺跡の発掘調査では、溝から獣骨が出土した。ここではこの獣骨について報告する。

2. 試料および方法

試料は、2区のSD66の9層から出土した獣骨1点である。獣骨は目視により発掘現場で採取され、チャック付の袋に収納されていた。

肉眼で現生標本と比較しつつ、観察と記載を行った。

3. 結果

陸生哺乳類であった。比較的大型と思われる。緻密質の組織は密で、ヒトではないと思われる。遺存状態が悪く、細かい破片に分かれており、部位は不明である。扁平な破片がみられ、肩甲骨や寛骨の可能性はある。表面に青色のピビアナイトが析出している破片が複数みられた。



第21図 出土動物遺体

第VI章 総括

第1節 縄文土器

本遺跡、特に2区の遺構覆土中からは8世紀後半を中心とする須恵器・土師器が出土したほか、少量ながら縄文土器や石器が出土している。時期が判明するものは少ないが、外面に平行沈線が施された鉢の破片がみられる(第15図36、第17図132・133)。これらは縄文晩期の吉岡式(富山市教委2002、鈴木2004a)に属する。周辺遺跡では、吳羽丘陵周辺に北代遺跡(中期)や長岡八町遺跡(後～晩期)があり、いずれも中核的集落として位置付けられている。また、本遺跡と近接する遺跡でも、縄文期の遺物が散発的に出土しており、先の遺跡との関連や、周辺部での遺構分布をうかがわせるものである。

第2節 1区

本調査区では土坑11基、溝1条を検出した。覆土からは少量ではあるが、8世紀後半頃の遺物が出土しているが、性格等については判断できるまでに至っていない。その他多数の不整形プランを検出したが、掘削を行った結果、ほとんどが覆土に多量の地山ブロックを含み、遺構壁面の立ち上がりも不明瞭なものであった。断面観察や残深度、底面の状況からみて、根掘りや圃場整備の際の掘り込みの可能性が考えられる。

第3節 2区

本調査区ではピット8基、土坑8基、溝13条、井戸2基を検出した。検出面は圃場整備の際に受けた攪乱の痕跡が調査区全体に広がっており、確実な遺構プランは断面観察に頼るところが大きかった。

本調査区の主体をなす溝は調査区全体にみられ、その方向から、下記のように大きく3群に分けられる。

1群：北西-南東方向に流れるもの(SD58・78・66・73・74・57)

2群：北-南方向に流れるもの(SD76・65・64・68・69・70)

3群：北西-南東方向に流れ、東方向へL字状に曲がるもの(SD55)

1群の溝は調査区西側に位置し、深度が1m前後を測る深いものが目立つ。壁面は直斜状に立ち上がる急斜なもので、遺物の出土量は多くない。

2群の溝は調査区東側に位置し、SD76を除いて残深度は10cm～30cm程度である。遺構上部の削平を考慮しても、1群の半分程度の深さとみられる。これらも遺物の出土量は多くない。

3群は調査区西端に位置し、北から南へ延び、南端で東方向へL字状に曲がる。区西溝の可能性もある。

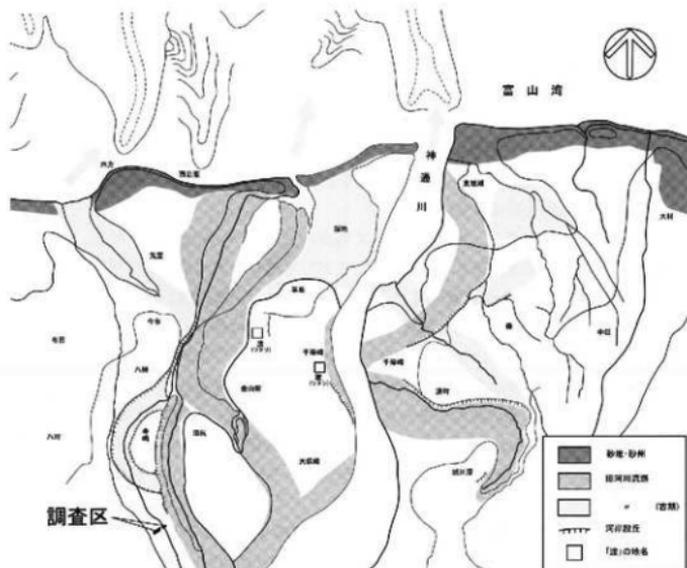
いずれの溝も底面の標高値から、北から南へ流れていたことがわかる。現況地形では、1区北側の水田標高が南側の水田標高より高いことから、旧地形も同様に南側へ下る地形であったとみられる。2区でも同様の地形であった可能性は高く、先の流水方向と合致すると考えられる。また、溝からの川土遺物量も多いとは言えず、常に水の流れがあった可能性がうかがえる。調査区内では、1・2群の重複関係は確認できず、前後関係はわかっていない。出土遺物は8世紀後半を中心に、9世紀前半頃の須恵器・土師器がみられるが、遺物数が少ないことや時期が近似していることから、厳密にその変遷を追うことは難しい。

現段階で、これら溝遺構の具体的な性格を考えるには材料不足であるが、流れる方向からみて水路や排水路のような性格をもつもので、同時期に併存、もしくは短期間に造りかえられたと考えられる。四方北遺跡発掘調査報告書にみられる、古川知明氏作成の古地理復元概念図(第21図)によると、本遺跡周辺を南北方向に蛇行しながら流れる旧流路の存在がうかがえ(富山市教委1998)、これらの遺

構もそういった自然地形に合わせて構築されたものであろう。特に2区の中でもSD76は、規模や位置的にも特に関連性が強い可能性をもつ。しかし、いずれの溝も北から南への水の流れは、河口部方向と逆行することになり、旧流路以外にも本調査区南側に谷や別の流路等が存在したと考えられる。これは近接する八ヶ山A遺跡や八町Ⅱ遺跡でも、時期は異なるが、古墳時代や中世の溝が確認されており、やはり南北方向のものであることから、その可能性がうかがえる。また、集落の変遷が追認可能な両遺跡では、古墳時代、中世いずれにおいても、その中心が東から西へ移動していることが判明している。本調査区ではそれらの時期に属する遺構や遺物が希薄であることから、両遺跡の集落の東端はやはり本調査区より西側にあたると思われる。

今回の調査では、律令期の住居や掘立柱建物など、集落を構成する遺構は確認できなかったが、用水路や排水路、区画溝と考えられる遺構を検出した。出土遺物には須恵器・土師器も一定数みられる。また、転用硯とみられる須恵器の蓋や杯があり、八町Ⅱ遺跡でも緑釉陶器が出土していることから、識字層をもつ集落が周囲に存在する可能性がある。

本遺跡周辺は『倭名類聚抄』の記述と現在の地名から、寒江郷に比定される地域である（根津2006）。すでに寒江郷を開墾した中心集落とみられる遺構が長岡杉林遺跡で確認され、その消長は8世紀前半から10世紀の間とされる（富山市教委1987）。また、北代遺跡や百塚住吉D遺跡でも同時期内の集落遺構が検出されており、先に推定した集落を含めて、寒江郷を構成していた一集落としてとらえることができる。さらに八町Ⅱ遺跡で検出された遺構が、中世寒江荘の関連集落とする意見を考え合わせると、周辺一帯は古代から連続と集落活動を行っていた様子がうかがえる。いずれにしても、現状では本遺跡

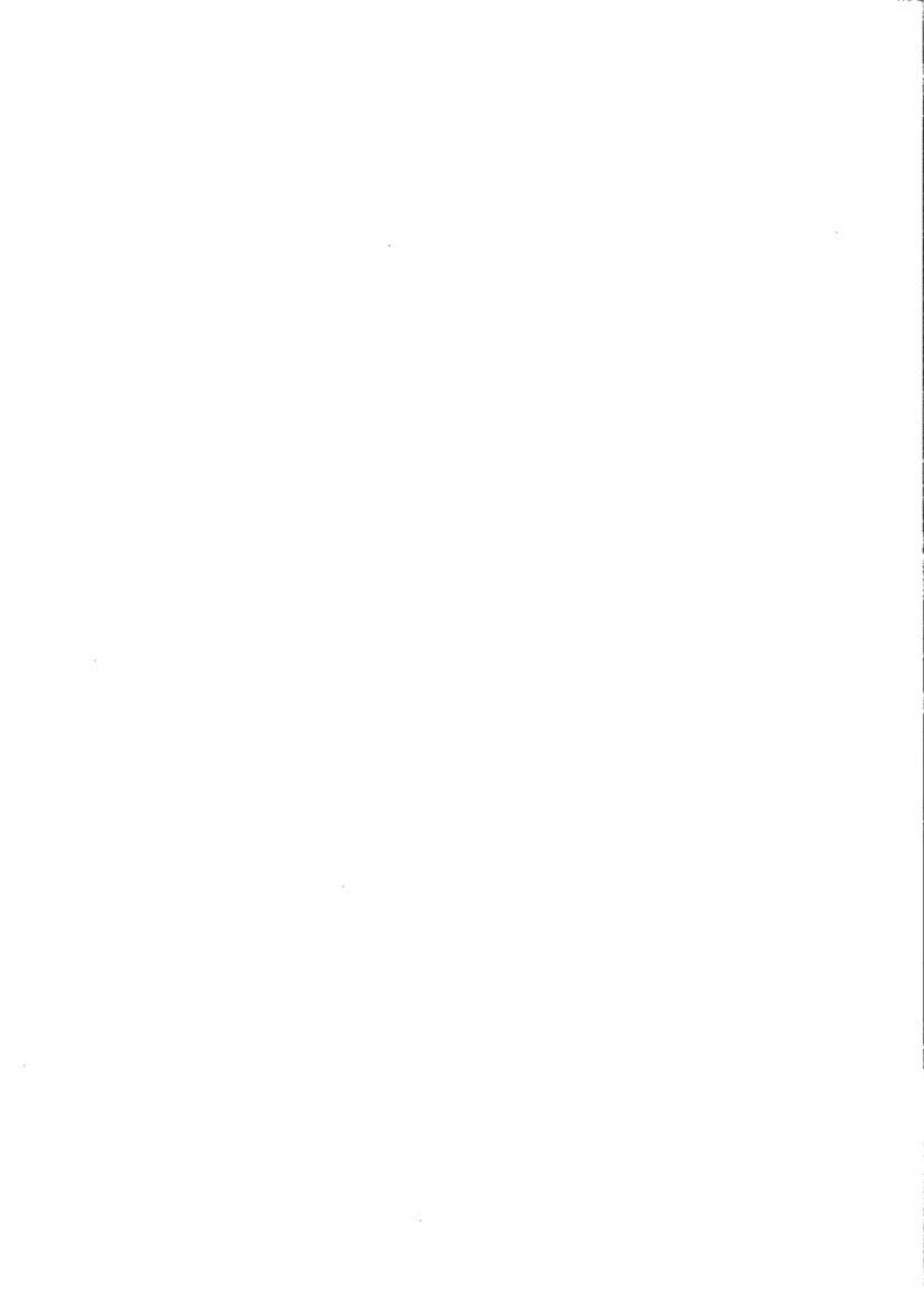


第22図 遺跡周辺の古地理復元概念図 アミの矢印は神通川旧・現流路の出口を示す
(富山市教委1998をトレース・加筆)

周辺の集落は、その存在自体も含めて推測の域を出るものではない。

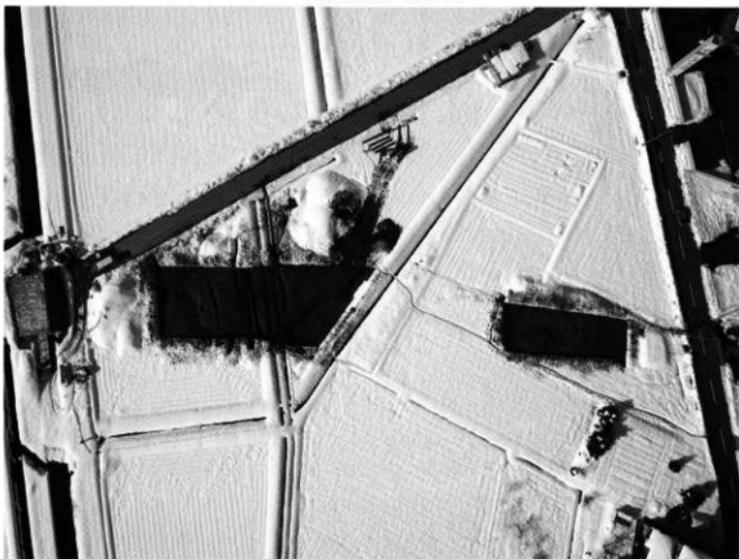
<参考文献>

- 富山市教育委員会 1987 『長岡杉林遺跡発掘調査報告書』
- 鹿島昌也 1997 「百塚住吉D遺跡」『富山市考古資料館報』第31号
- 富山市教育委員会 1998 『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅱ 四方北窪遺跡』
- 富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会 1999 『富山市四方荒屋遺跡発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 1999 『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅲ 四方北窪遺跡』
- 富山市教育委員会 2002 『富山市吉岡遺跡・経力遺跡発掘調査報告書-珠泉ニュータウン造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-』
- 富山市教育委員会・環境事業団富山建設事務所 2003 『富山市長岡八町遺跡発掘調査報告書-富山地区地球温暖化対策緑地（北代緑地）造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-』
- 鈴木正博 2004 a 「『橿原式』から『唐古式へ』-「木葉文」生成の型式構えは如何にして形成されたか」『古代』第115号
- 富山市教育委員会 2004 b 『富山市打出遺跡発掘調査報告書-富山市打出土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-』
- 富山市教育委員会 2005 『富山市内遺跡発掘調査概要VI-百塚住吉D遺跡・打出遺跡』
- 根津明義 2006 「越中国射水郡における諸郷の所在について」『富山史壇』第149号
- 富山市教育委員会 2008 『富山市八町II遺跡発掘調査報告書-県営農免農道（呉羽和合2期地区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-』
- 富山市教育委員会 2010 『富山市八ヶヶ山A遺跡発掘調査報告書-基幹農道（呉羽和合4期地区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-』





1. 調査区遠景（南から）



2. 調査区全景（上が北）



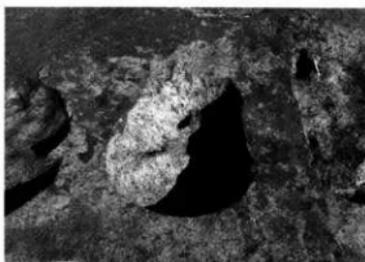
1. 1区 調査前状況（東から）



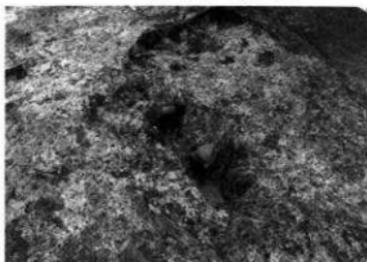
2. 1区 遺構検出状況（西から）



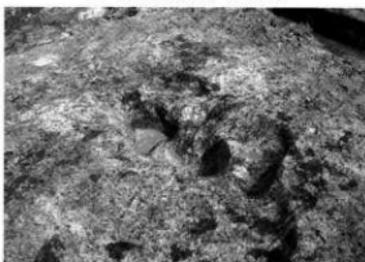
1. SK38セクション (西から)



2. SK38完掘状況 (西から)



3. SK41遺物出土状況 (北から)



4. SK41完掘状況 (南から)



5. SK42セクション (南西から)



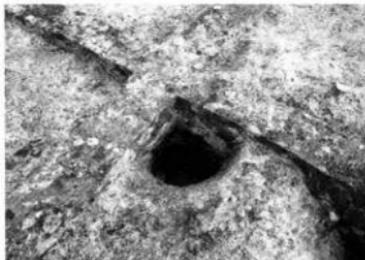
6. SK42完掘状況 (西から)



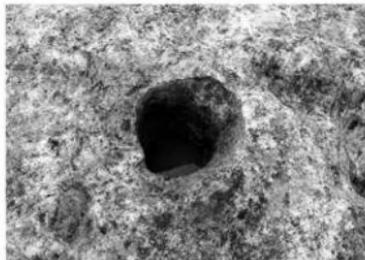
7. SK59セクション (西から)



8. SK59完掘状況 (西から)



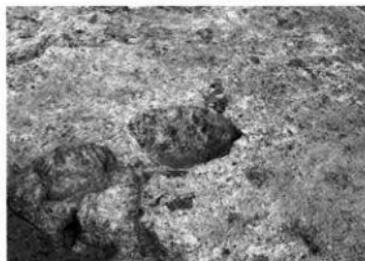
1. SK60セクション (西から)



2. SK60完掘状況 (西から)



3. SK61セクション (南から)



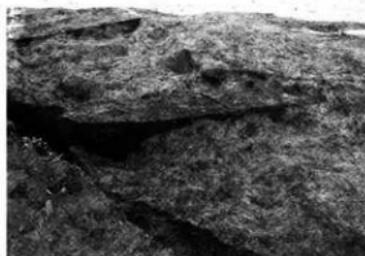
4. SK61完掘状況 (南から)



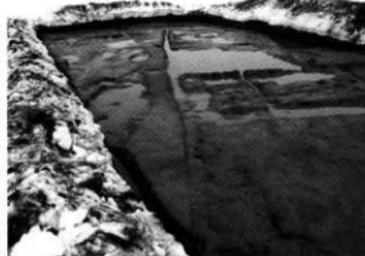
5. SD16セクションAA' (東から)



6. SD16セクションBB' (東から)



7. SD16セクションCC' (東から)



8. SD16完掘状況 (東から)



1. SK54-53-50検出状況 (南から)



2. SK54-53-50セクション (南から)



1. SK54-53-50遺物出土状況（南東から）



2. SK54-53-50完掘状況（南から）



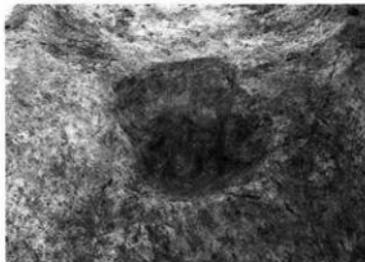
1. 2区調査前状況（西から）



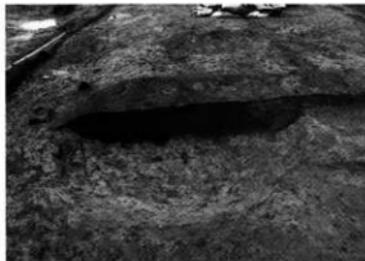
2. 2区遺構検出状況（上が北）



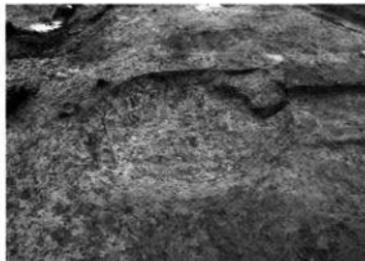
1. SK67セクション (北から)



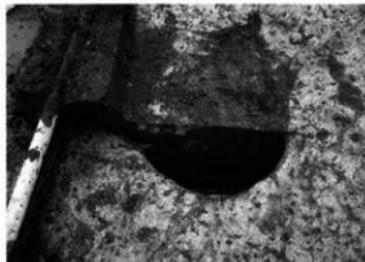
2. SK67完掘状況 (北から)



3. SK72セクション (南から)



4. SK72完掘状況 (南から)



5. SK80セクション (北から)



6. SK80遺物出土状況 (北から)



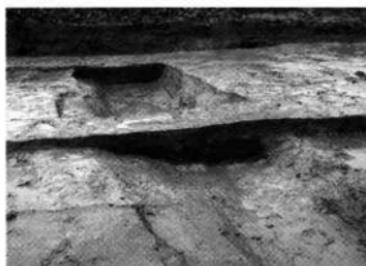
7. SD55セクション (南から)



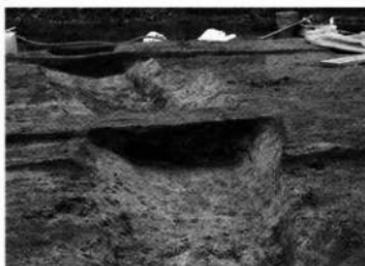
8. SD55遺物出土状況 (南から)



1. SD55完掘状況 (南から)



2. SD57セクションCC' (南から)



3. SD57セクションDD' (南から)



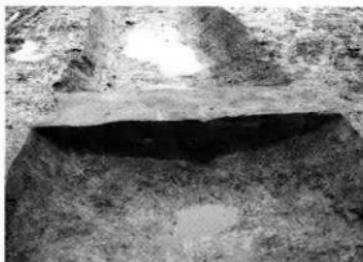
4. SD57セクションEE' (南から)



5. SD57完掘状況 (南から)



1. SD58セクションCC' (南から)



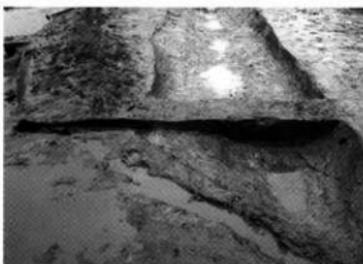
2. SD58セクションDD' (南から)



3. SD58完掘状況 (南から)



4. SD64セクションEE' (南から)



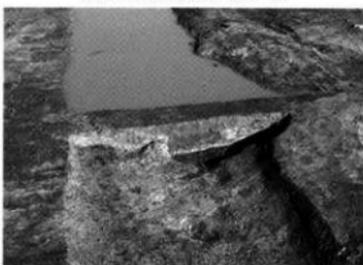
5. SD64セクションFF' (南から)



6. SD64完掘状況 (南から)



7. SD65セクションAA' (南から)



8. SD65セクションBB' (南から)



1. SD65完掘状況 (南から)



2. SD66セクションAA' (南から)



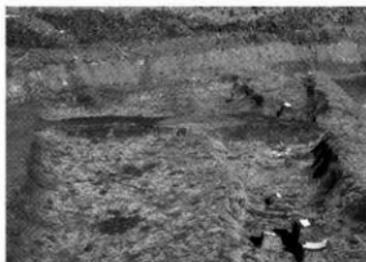
3. SD66セクションBB' (南から)



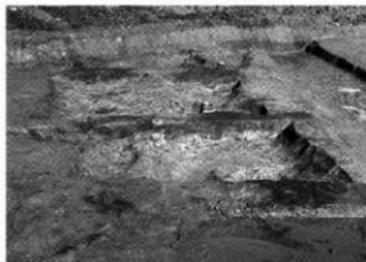
4. SD66骨出土状況 (南から)



5. SD66完掘状況 (南から)



6. SD70-69-68セクションAA' (南から)



7. SD70-69-68セクションBB' (南から)



8. SD70-69-68セクションCC' (南から)



1. SD70-69-68遺物出土状況 (南から)



2. SD70-69-68完掘状況 (南から)



3. SD73セクションAA' (南から)



4. SD73セクションBB' (南から)



5. SD73完掘状況 (南から)



6. SD74セクションAA' (南から)



7. SD74セクションBB' (南から)



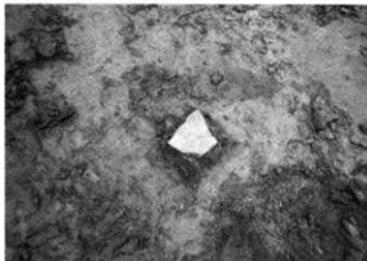
8. SD74完掘状況 (南から)



1. SD76セクションCC' (北から)



2. SD76完掘状況 (南から)



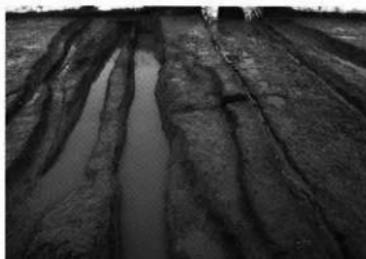
1. SD76遺物出土状況（東から）



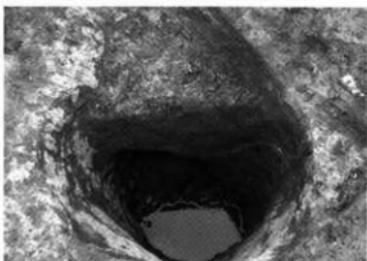
2. SD76遺物出土状況（東から）



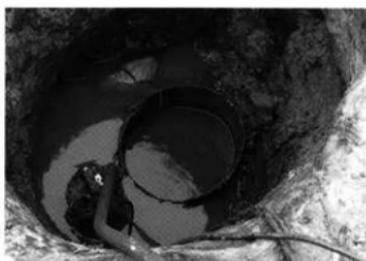
3. SD78セクション（南西から）



4. SD78完掘状況（南から）



5. SE56セクション（南から）



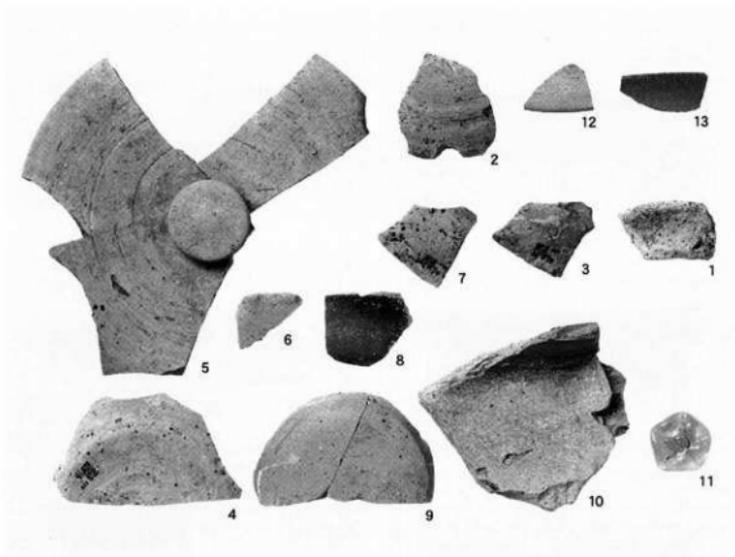
6. SE56遺物出土状況（南から）



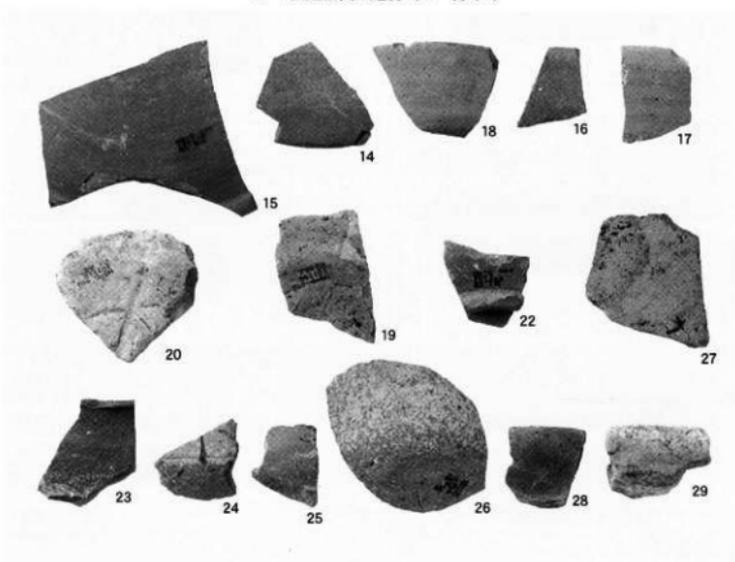
7. SE56完掘状況（南から）



8. 作業状況



1. 1区遺構出土遺物 (S=約1/3)



2. 1区表土・攪乱出土遺物 (S=約1/3)



21



50



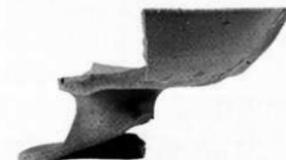
55



51



52



59



54



148

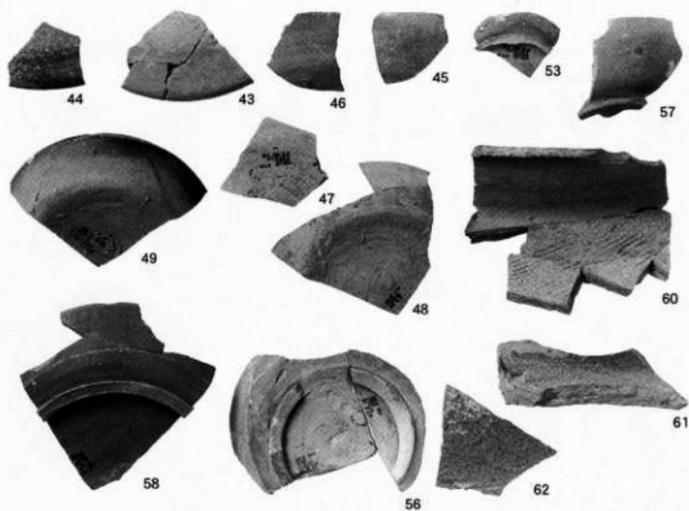


33

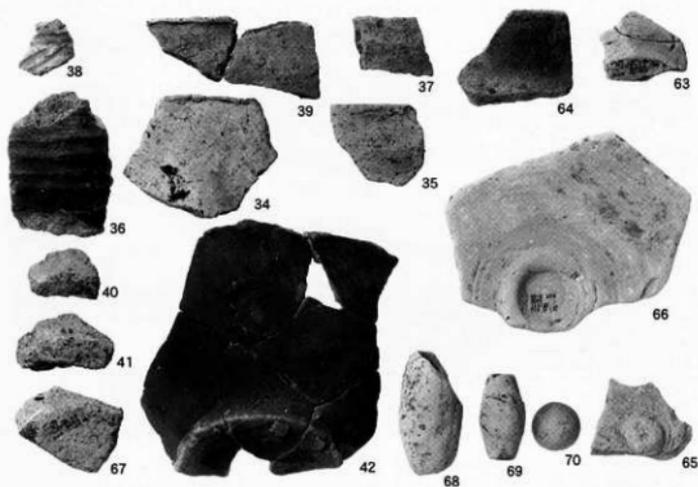


71

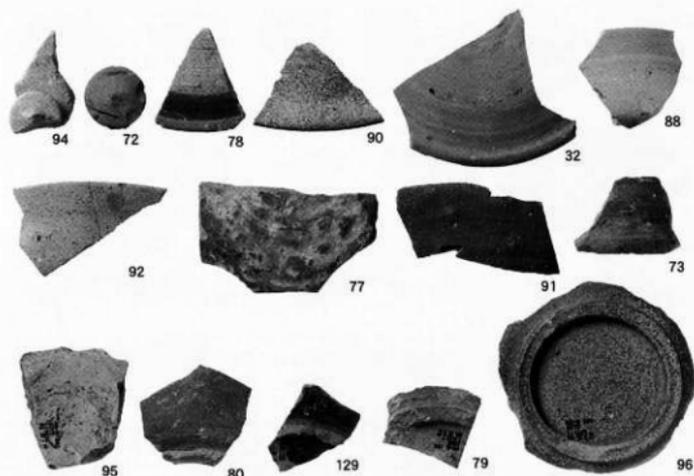
1. 1·2区出土遺物 (S=約1/2)



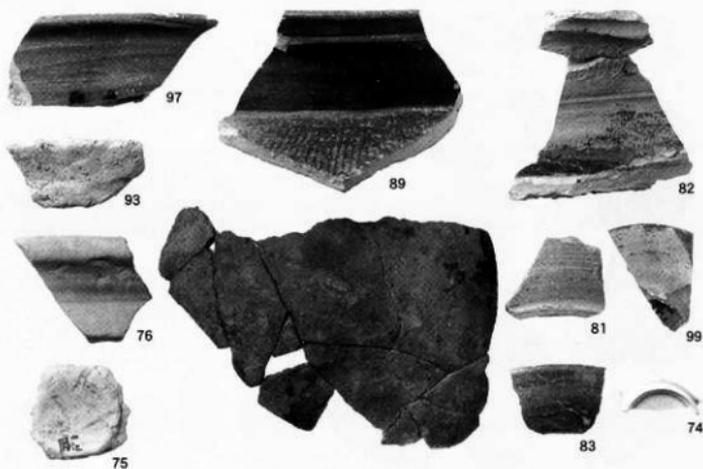
1. 2区遺構出土遺物(1) (S=約1/3)



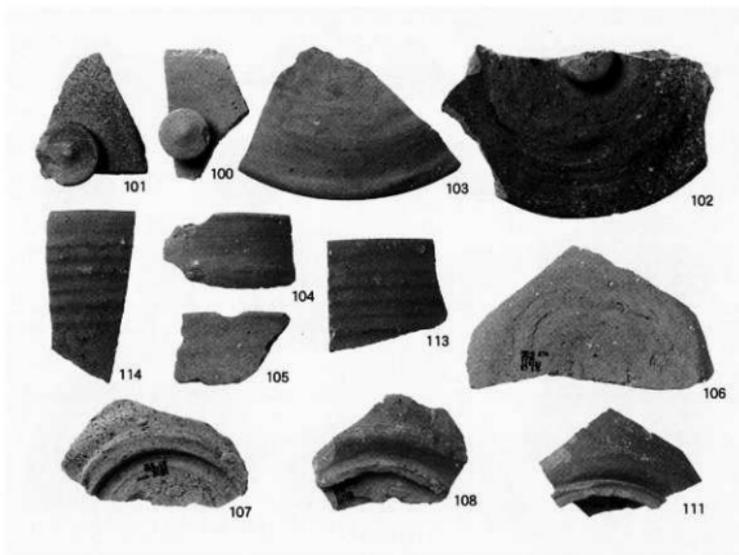
2. 2区遺構出土遺物(2) (S=約1/3)



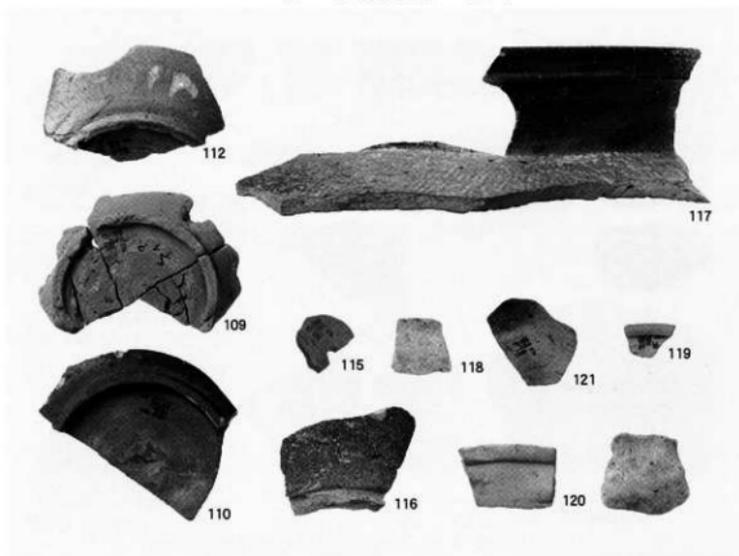
1. 2区遺構出土遺物(3) (S=約1/3)



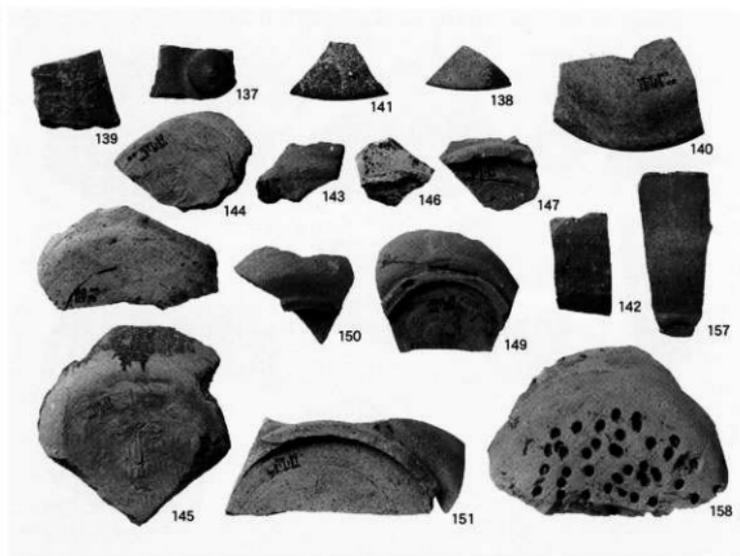
2. 2区遺構出土遺物(4) (S=約1/3)



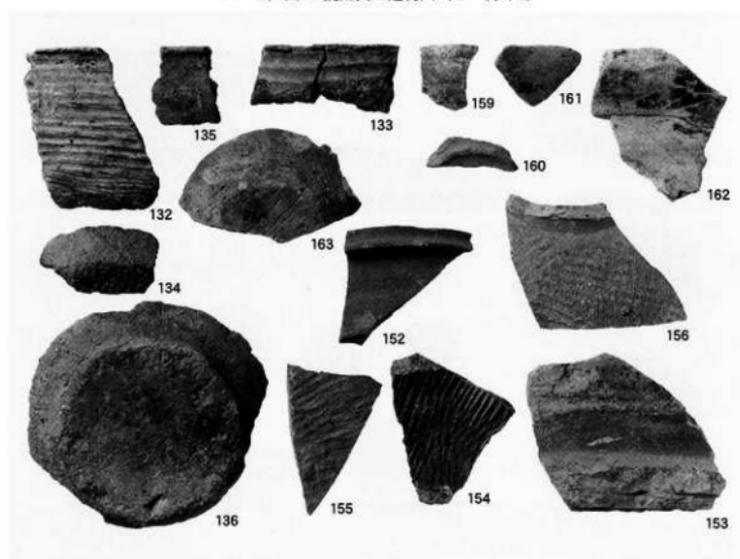
1. 2区SD76出土遺物(1) (S=約1/3)



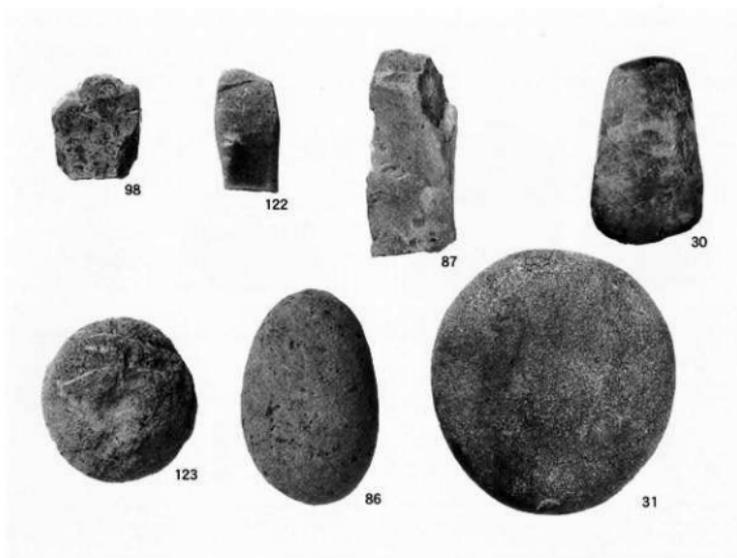
2. 2区SD76出土遺物(2) (S=約1/3)



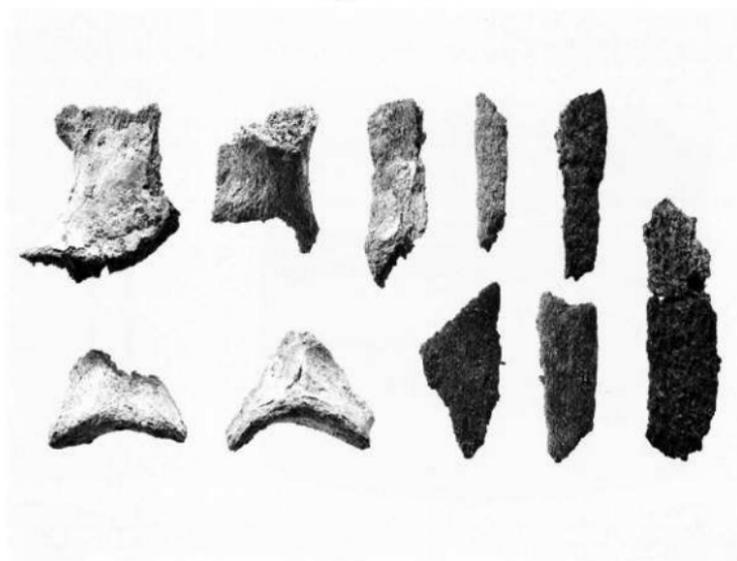
1. 2区表土・攪乱出土遺物(1) (S=約1/3)



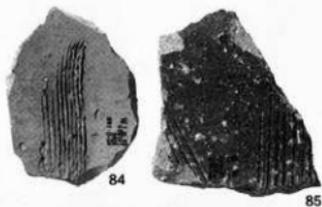
2. 2区表土・攪乱出土遺物(2) (S=約1/3)



1. 石製品 (S=約1/2)



2. SD66出土獣骨



1. SD76出土陶磁器 (S=約1/3)

2. 2区攪乱出土陶磁器 (S=約1/3)



3. SE56出土遺物 (130: S=約1/3, 131・166: S=約1/3)

報 告 書 抄 録

ふりがな	とやましやくづかすみよしでいーいせきはつつちようさほうこくしょ							
書 名	富山市百塚住吉D遺跡発掘調査報告書							
副 番 名	基幹農道只羽和合4期地区農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	42							
編 著 者 名	鹿島昌也 H聖祐輔 阿部弥生							
編 集 機 関	株式会社イビソク 北陸支店 TEL076-491-6376							
所 在 地	〒939-8213 富山県富山市黒瀬298-1 IB・B400号							
発 行 機 関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒930-0091 富山県富山市愛宕町一丁目2-24 TEL076-442-4246							
発 行 年 月 日	西暦2011(平成23)年3月17日							
ふりがな 所 収 遺 跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	道庁番号					
百塚住吉D遺跡	とやまし 富山県 富山市 このがき 八ヶ山 てらしま 寺島	16201	201183	36° 40' 39"	137° 07' 38"	20101108 — 20110204	900	基幹農道只羽 和合2期地区 農道整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
百塚住吉D遺跡	集落	縄文		縄文土器(後期) 小器(器蓋の等、磨石、凹石)				
		弥生		埴				
		古代	ピット、土坑、溝	須恵器、土師器、土鐘 (8世紀後半～9世紀前半)		転用税		
		中世	井戸	珠洲、曲物		遺物は放射性炭素年代測定の結果、11世紀末～12世紀中頃の年代が示された。		
		近世	井戸	越中瀬戸、大目、陶胎発付				
要 約	<p>1区では土坑11基、溝1条を検出した。いずれも少量ながら8世紀後半頃の遺物を含む。</p> <p>2区ではピット8基、土坑8基、溝13条、井戸2基を検出した。溝は設置方向から3群に分類できるが、重複関係がないことや、出土遺物が大きな時期差をもたないことから、変遷を辿るまでには至っていない。溝の性格は用水路や排水路、区画溝などが考えられるが、確証は得られていない。</p> <p>その他、転用税や煮漁具などの出土からは、周囲に識字層をもつ集落の存在がうかがえ、今回検出した遺構もその一端の可能性がある。</p>							

富山市埋蔵文化財調査報告書

富山市百塚住吉D遺跡発掘調査報告書

- 基幹農道(只羽和合4期地区)整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-

2011(平成23)年3月17日発行

編 集 (株)イビソク 北陸支店

〒939-8213 富山県富山市黒瀬298-1 IB・B400号

電話 076-491-6376

FAX 076-491-6250

発 行 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0091 富山県富山市愛宕町1丁目2-24

電話 076-442-4246

FAX 076-442-5810

E-mail maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印 刷 富士出版印刷株式会社

